

文部科学省平成23年度
「高等学校教育の推進に関する取組の調査研究」
委託調査研究報告書

高等学校定時制課程・通信制課程の
在り方に関する調査研究

平成24年3月

財団法人 全国高等学校定時制通信制教育振興会

目 次

まえがき	1
調査研究の概要	2
文部科学省委託調査研究検討委員会名簿	3
第1章 学校の設置形態及び規模・組織形態等に見る現状と課題 (管理職に回答してもらったアンケート項目の結果)	4
第2章 生徒の実態について (管理職に回答してもらったアンケート項目の結果)	15
第3章 生徒の意識調査について (生徒の直接質問として回答を得た結果)	24
結びに替えて(提言)	44

まえがき

文部科学省の平成23年度「高等教育改革の推進に関する取り組み」の実践研究のうち、高等学校の定時制課程・通信制課程の在り方に関する調査研究について、財団法人全国高等学校定時制通信制教育振興会にその調査研究を託されたので、当振興会は、全国定時制通信制高等学校長会、全国高等学校定時制通信制教頭・副校長協会、全国高等学校通信制教育研究会から調査研究検討委員会を組織し調査研究を行った。

高等学校への進学率は約98%に達し、現在では国民的な教育機関となっている。多様化する生徒の実状を踏まえるとともに、高等学校を取り巻く社会経済等の環境の変化に対応するため、生徒の実態とそれに対応した学校の取り組み、生徒や保護者、地域、社会のニーズに応じた高等学校づくりを進める必要がある。

そのためまず、研究調査は、現状を正確に把握するために、当振興会は、全国定時制通信制高等学校長会、全国高等学校定時制通信制教頭・副校長協会、全国高等学校通信制教育研究会の協力を得て、全国的な調査として高等学校定時制課程・通信制課程に在学している生徒の実状、入学動機並びに、不登校経験者、中途退学者、学習障害・発達障害のある生徒など、多様な生徒の生活実態及び学習実態とそれに応じた学校の取り組みやスクールカウンセラー、ソーシャルワーカー等の配置状況、通信制課程における面接指導の実態、学校以外での教育施設との連携状況等のアンケート調査を行った。

調査は電子メール及び郵便を利用して、学校用33項目と生徒用21項目に分けて行った。全国804校に送り、その内739校から回答があり、92%の回収率となった。それぞれの回答を集計して、8回検討会議を行い、それぞれの課題について考察・検討して分析を行った。

ここに報告書をまとめ報告するに当たり、文部科学省はじめ調査にご協力を頂いた各学校に深く感謝を申し上げる。

1. 実態調査の概要

この調査研究は、文部科学省より平成23年度「高等学校教育の推進に関する取組の調査研究」の実施について委託を受けて、全国の高等学校定時制課程及び通信制課程に学ぶ生徒の実態調査研究を行った。その成果を広く公表することにより、全国高等学校定時制通信制教育の充実・改善に役立てることを目標に、財団法人全国高等学校定時制通信制教育振興会が調査研究検討委員会を設置し、全国定時制通信制高等学校長会、全国高等学校定時制通信制教頭・副校長協会並びに全国高等学校通信制教育研究会の協力を得て行ったものである。

- (1) 調査研究の趣旨：高等学校への進学率は約98%に達し、もはや国民的な教育機関となっている。高等学校を取り巻く社会経済等の環境の変化に対応するためには、多様化する生徒の実状を踏まえるとともに、生徒や保護者、地域、社会のニーズに応じた高等学校づくりを進める必要がある。

このため、高等学校の定時制課程・通信制課程の在り方に関する調査研究の一環として、全国の高等学校定時制課程及び通信制課程に在学する生徒の実態を把握することに主眼を置いてアンケート調査並びに考察を行った。その成果を広く普及することにより、高等学校教育の充実に資するものとする。

- (2) 調査研究の内容：本調査研究は、定時制課程・通信制課程の在り方に関する調査研究を中心に、全国の高等学校定時制課程及び通信制課程に在学する生徒の実態をアンケート調査により実施した。

多様な生徒の実態（不登校経験者、中途退学者、家庭環境、学習環境、学習障害・発達障害のある者、）と学校の取り組み・体制（スクールカウンセラー、ソーシャルワーカーの配置）等のアンケート調査。

- (3) 調査研究の方法：（財）全国高等学校定時制通信制教育振興会内に、本調査研究のための検討委員会を設置し、全国定時制通信制高等学校長会、全国高等学校定時制通信制教頭・副校長協会、全国高等学校通信制教育研究会の協力のもとに全国の定時制・通信制高校にアンケート調査を実施、その結果を分析して、定時制・通信制高校の現状と課題を冊子にまとめた。

2. アンケート調査について

- (1) 調査対象：全国の定時制課程または通信制課程を置く高等学校
804校（定時制655校、通信制149校）

- (2) 回収率：91.9% 739校／804校

- (3) 調査項目：生徒数、教員数、教務、学校の実態について（32項目）
生徒に関する項目（21項目）

- (4) 調査期間：平成23年9月20日～平成23年10月31日
通年で扱う事項については、平成22年度の数値である。

文部科学省委託調査研究検討委員会委員名簿

調査研究代表者：石曾根誠一 (財) 全国高等学校定時制通信制教育振興会常務理事
事務局担当：徳重 隆 (財) 全国高等学校定時制通信制教育振興会事務局長

(五十音順)

石曾根誠一	(財) 全国高等学校定時制通信制教育振興会・常務理事
岩田 秀彦	全国定時制通信制高等学校長会・生徒指導委員長
奥村 英夫	全国高等学校定時制通信制教頭・副校長協会・総務部長
田中 嘉子	全国高等学校定時制通信制教頭・副校長協会・事務局員
徳重 隆	(財) 全国高等学校定時制通信制教育振興会・事務局長
栃倉 和則	全国高等学校定時制通信制教頭・副校長協会・理事長
中川 洌	全国高等学校通信教育研究会事務局長
長山 晃一	全国定時制通信制高等学校長会・理事長
名取 康雄	全国高等学校定時制通信制教頭・副校長協会・調査研究部長
野村 博文	全国高等学校通信教育研究会・NHK 学園副校長
平島 満	全国定時制通信制高等学校長会・事務局長
丸山 正広	全国定時制通信制高等学校長会副理事長
善本 久子	全国定時制通信制高等学校長会・教育課程委員長
渡邊 洋一	全国高等学校通信教育研究会・会長

第1章 学校の設置形態及び規模・組織形態等に見る現状と課題

(第1章と第2章は管理職の先生方に回答していただいたアンケート項目の結果である。)

【1-1】課程はどちらですか

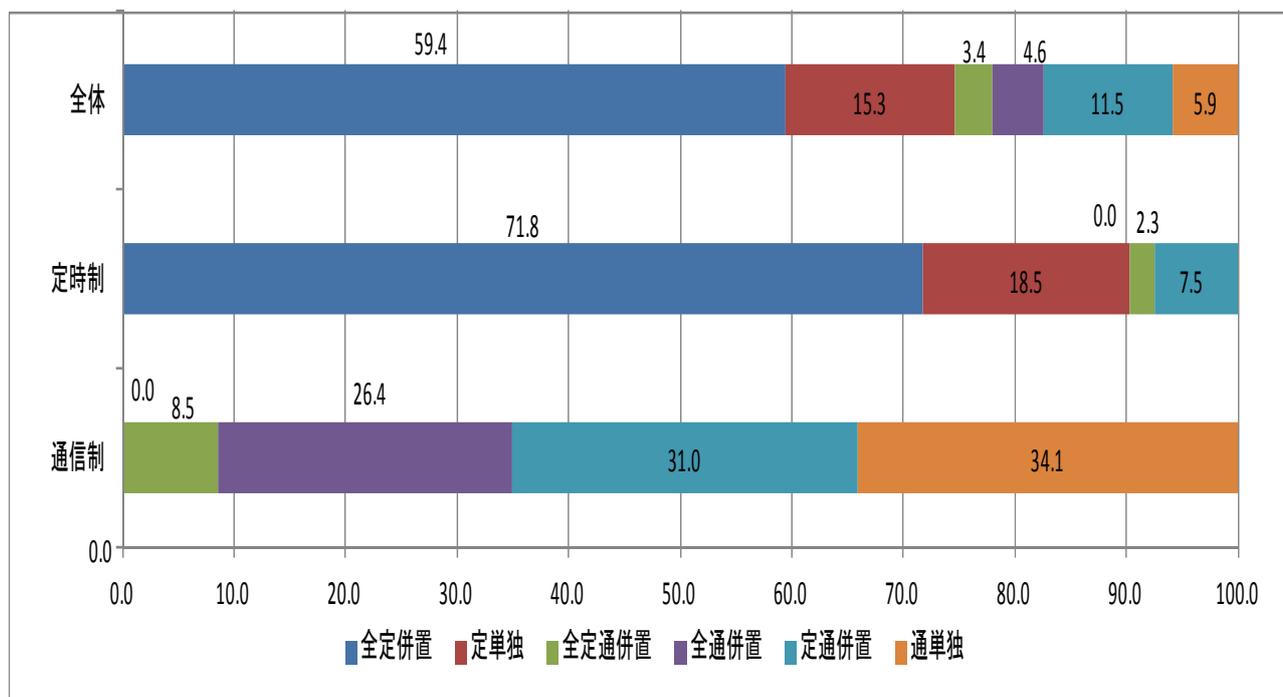
1 定時制課程 617校 2 通信制課程 129校

今回の調査に参加した定時制課程、通信制課程の学校数は739校でほぼ当振興会に加盟している校数である。

【1-2】貴校の設置形態はどれにあたりますか。

1 全定併置 2 定単独 3 全定通併置 4 全通併置
5 定通併置 6 通単独

1-1図 設置形態について

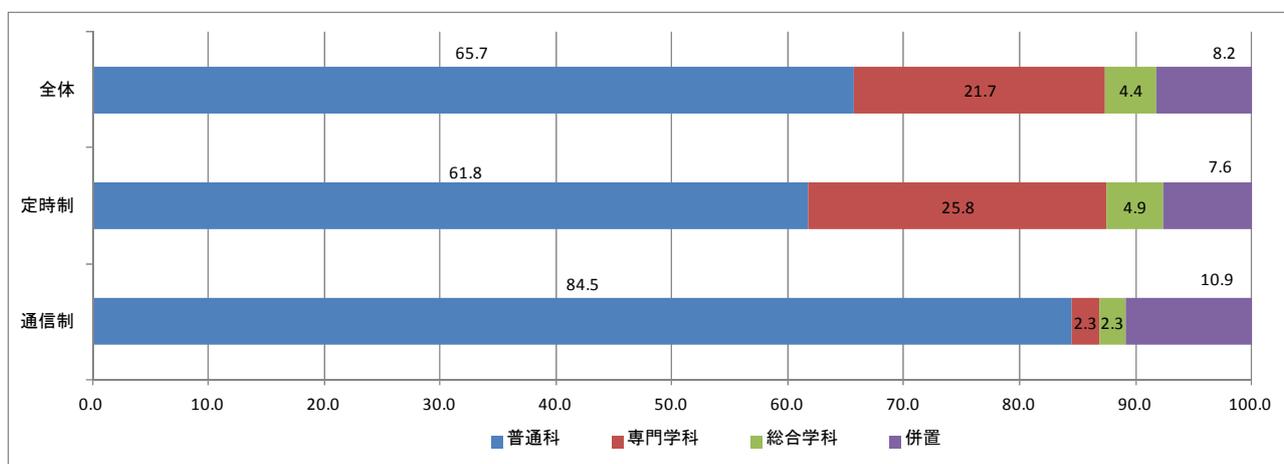


学校の設置形態から見ると、全定併置校が59.4%を占め、次いで、定時制単独の単位制を採用している学校が15.3%となっている。通信制は通信制単独校、次いで定時制通信制併置校、全日制に併置された学校の順になっている。かつては全定併置が一般的で、いわゆる伝統校に通信制課程が併置されていたが、それぞれに単独校へと変わりつつある。

【1-3】学科はどれにあたりますか

- 1 普通科 2 専門学科（商・工・農・その他） 3 総合学科
4 普通科・専門学科併置

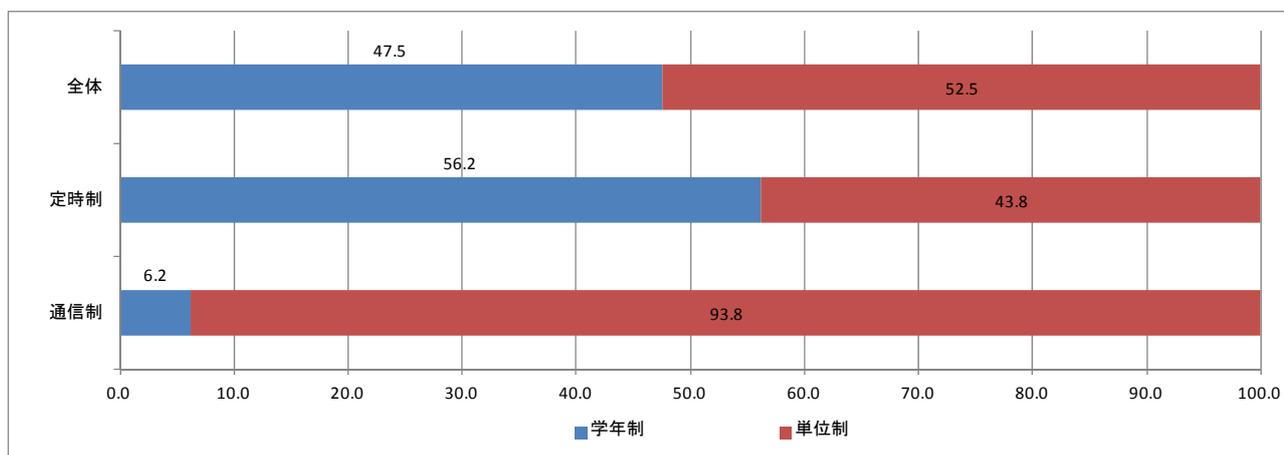
1-2図 学科について



1-2図、から明らかなように、設置学科についてみると定時制課程では需要の多い普通科に次いで専門学科が多く設置されているのに対し、通信制課程では普通科がほとんどで、実技等の伴う専門学科の設置が難しいことが表れている。

【1-4】学年制ですか、単位制ですか。

1-3図 学年制又は単位制

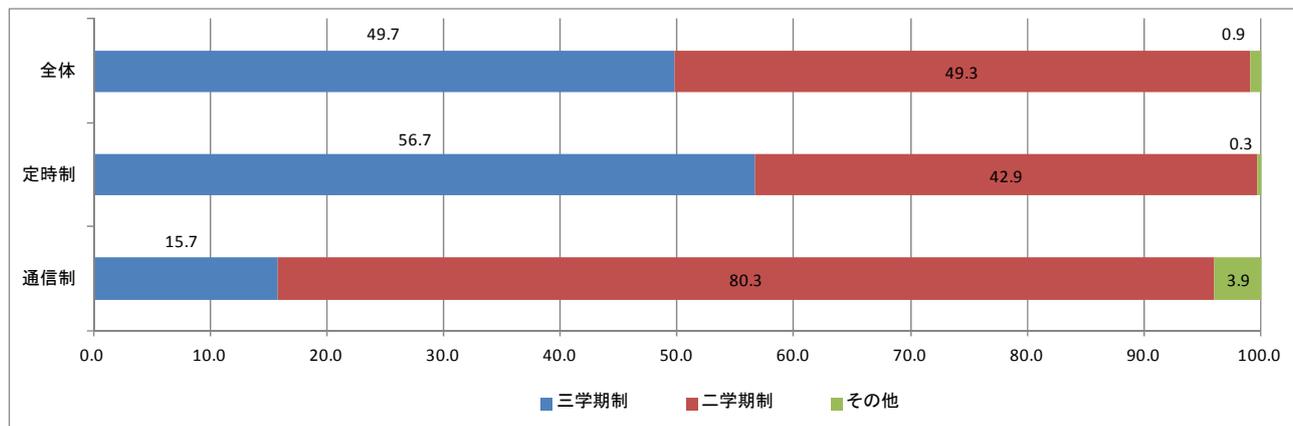


1-3図、1-4図で示されているが、定時制課程と通信制課程では設置学科、学年制・単位制、学期制に大きな違いがある。昭和62年12月高等学校定時制通信制教育検討会議において「高等学校定時制通信制教育の改善」報告が出され、翌年3月学校教育法施行規則改正で、定時制通信制課程において単位制高等学校が創設され、全国で3校が名乗り出て施行された。その後、単位制への切り替えを行う学校が年と共に増加し、平成11年3月時点では定通併せて169校が単位制を採用していたが、本調査では、定時制課程では303校、通信制課程では191校、合計494校となっている。通信制課程においては単位の認定等の都合で単位制を採用している学校が多い。定

時制高校では明確に単位制を採用している学校と学年制をとっている学校の数においては大きな差はないと考えられる。

【1-5】三学期制ですか、二学期制ですか

1-4図 学期制について



学期の構成については、定時制課程では三学期制を採用している学校は56.7%、二学期制を採用している学校は42.9%と平成10年度に行った前回の調査と比較すると三学期制が大きく減少し、二学期制は大きく伸びている。また、四学期制を採用している学校も1校あった。通信制課程では単位の認定の関係もあり半期で単位の認定等が行われることもあって二学期制を採用しているところが80.3%と圧倒的に多く採用されている。続いて三学期制が15.7%で、その他は無学期制等があった。

【1-6】全校でクラス数はいくらですか。（定時制のみ回答）

表1. 全校のクラス数

クラス数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
学校数	4	7	27	299	11	12	25	72	15	7	11
クラス数	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22以上
学校数	45	11	6	5	12	4	2	1	10	1	29

全校でのクラス数を見ると4クラスが最も多く次いで8クラス、12クラスの順である。定時制課程では単クラスの学年が多く、1学年で2クラスまたは3クラスという夜間定時制課程としては比較的大規模校と言われる学校が少なくなって来ていることを意味している。1クラスまたは2クラスという学校は閉課程間近の学校である。また、3または4の倍数に当てはまらないクラス数を有する学校は臨時増クラスを行った学校と考えることができる。

1校平均は6.4クラスであった。昼間定時制課程など新しいタイプの定時制単独校などは全国的にクラス数が比較的多いと考えられるが、ここに現れている数値は歴史の長い学校の夜間定時制課程など全日制課程との併置校のクラス数が減少していることを表している。

【1-7】5月1日現在の生徒数は何人ですか

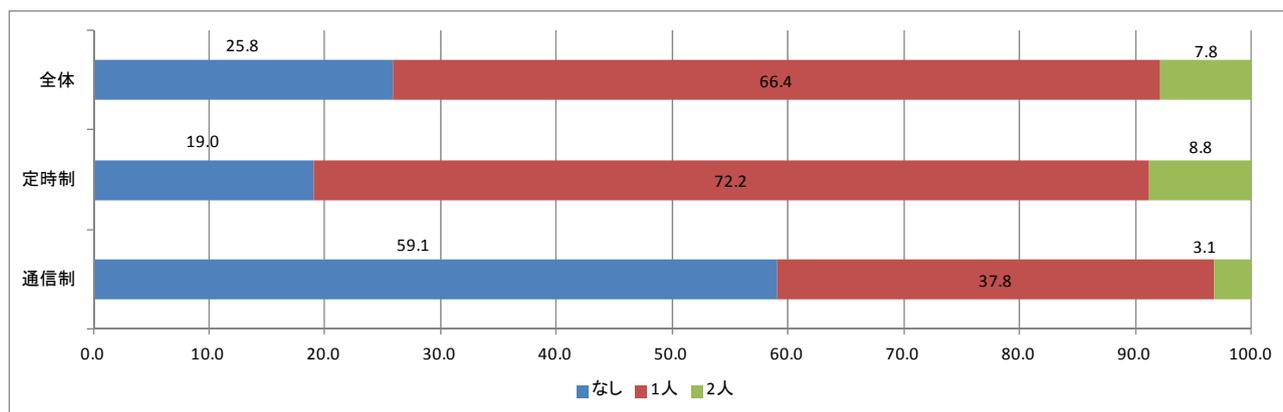
定時制617校の回答で、総数100,731人、1校平均163.3人。

定時制の場合、1クラスあたり25.5人の計算になる。

通信制129校の回答で、総数144,155人、1校平均1117.5人。

【1-8】教員数の内訳

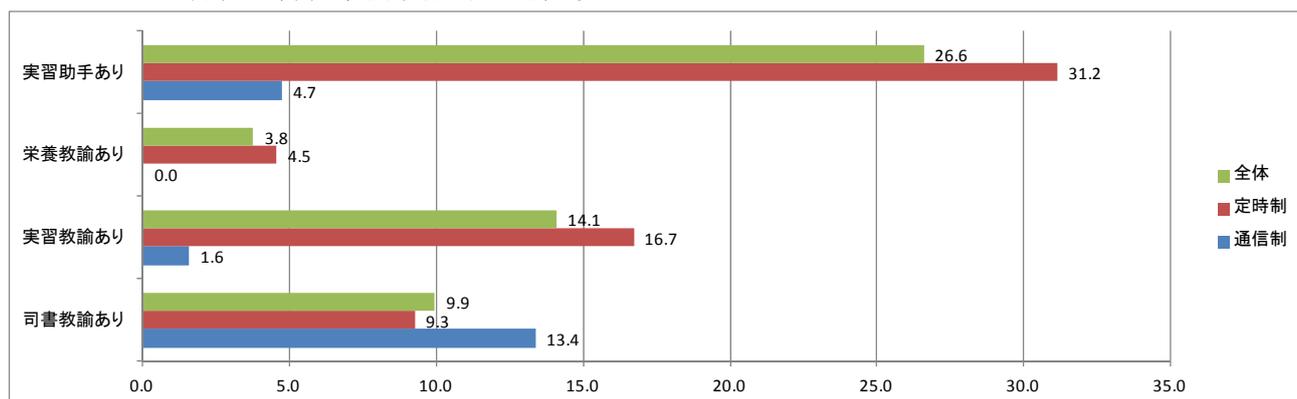
1-5図 養護教諭の配置状況



校長以下教諭については生徒数に応じた配置がなされているものと考え、ここでは養護教諭等についての配置について見ることとした。

定時制課程19.0%、通信制課程59.1%で配置がされていない。心身の健康上様々な課題をもち、支援を要する生徒が多く在籍する定時制・通信制においては、養護教諭の全校配置が課題として取り上げられる必要があり、この状況は一刻も早く改善されるべき重要課題である。

1-6図 司書、実習、栄養教諭等の配置状況

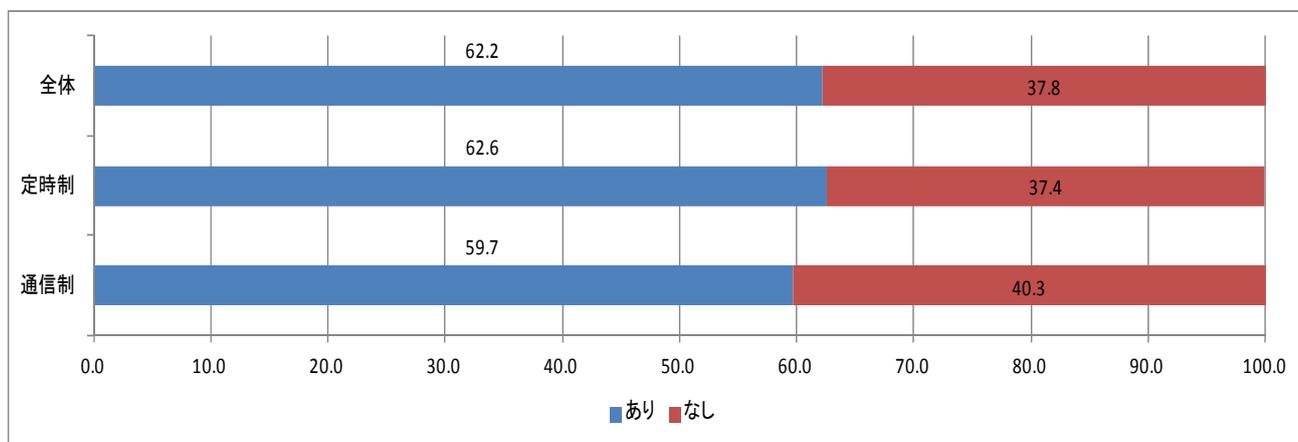


司書教諭、実習教諭、栄養教諭、実習助手等について調査した。司書教諭について見ると通信制課程では13.4%程度の配置に対し、定時制課程では9.3%の配置しかない。この他定時制課程において実習教諭、実習助手の配置も16.7%及び31.2%となっている。また、生徒の食育が課題となっているが、栄養教諭がほとんど配置されていないのが実状といえる。

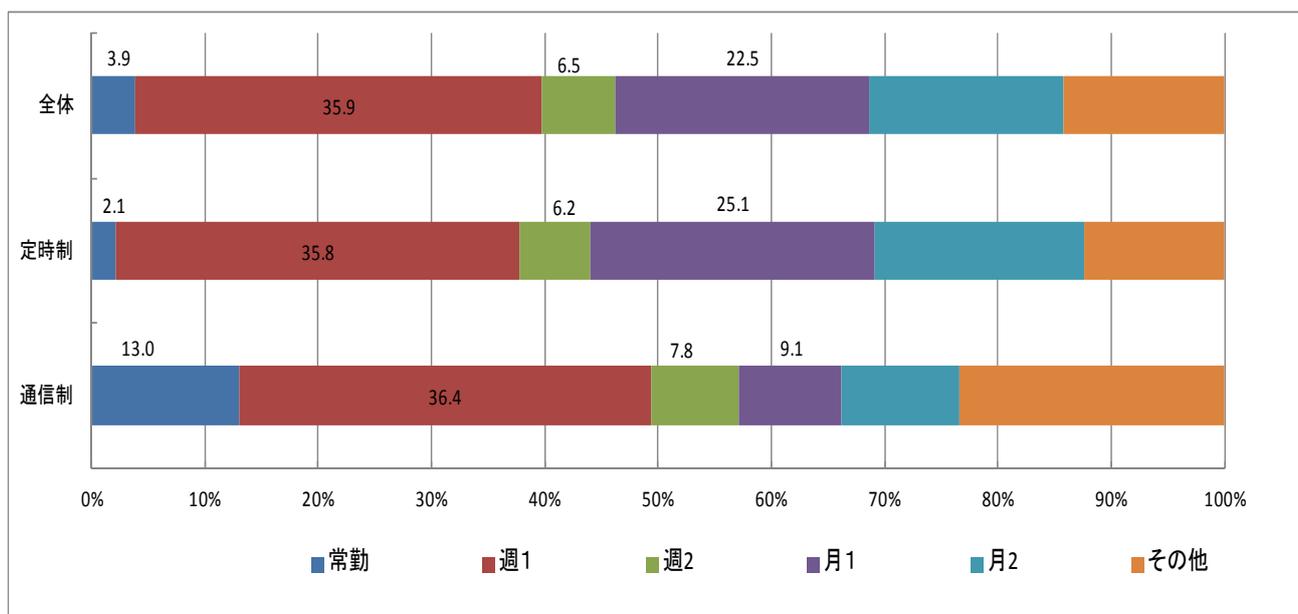
【1-9】 スクールカウンセラーの配置はありますか。ある場合は、常勤ですか、非常勤ですか

1-7図 スクールカウンセラーの配置状況

配置の有無



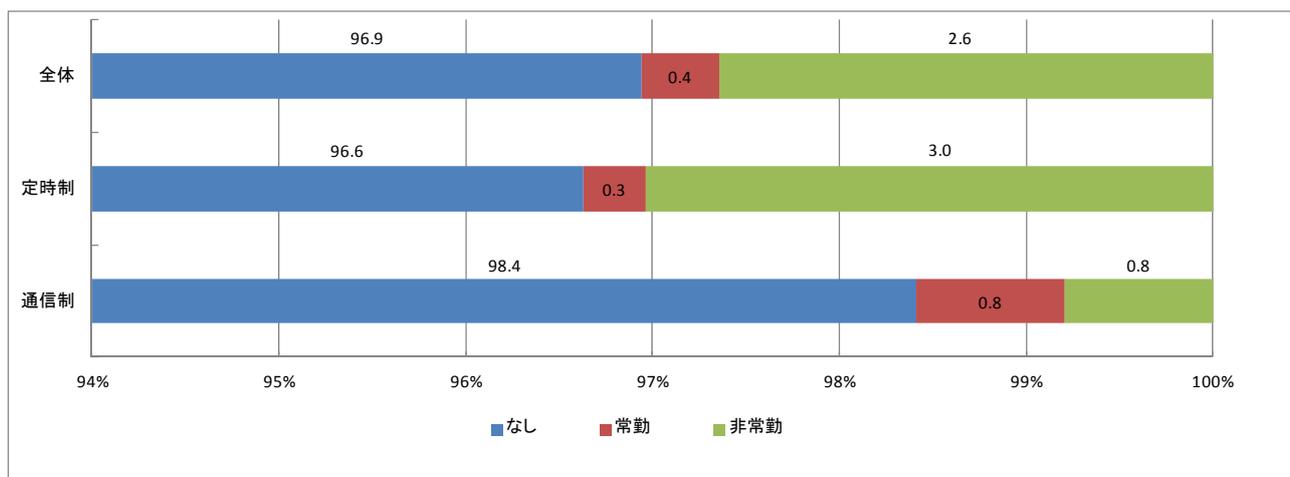
配置校の配置状況



スクールカウンセラーは、定時制課程 62.6%、通信制課程 59.7%の学校に配置されている。しかし、常勤のスクールカウンセラーは非常に少なく、週1回あるいは月2回程度勤務の非常勤である。支援を要する生徒が多く在籍する現状を鑑みる時、養護教諭の配置と併せ、スクールカウンセラーの常勤勤務頻度を高めていくことが大切である。

【1-10】 ソーシャルワーカーの配置はありますか。ある場合は、常勤ですか、非常勤ですか

1-8 図 ソーシャルワーカーの配置状況



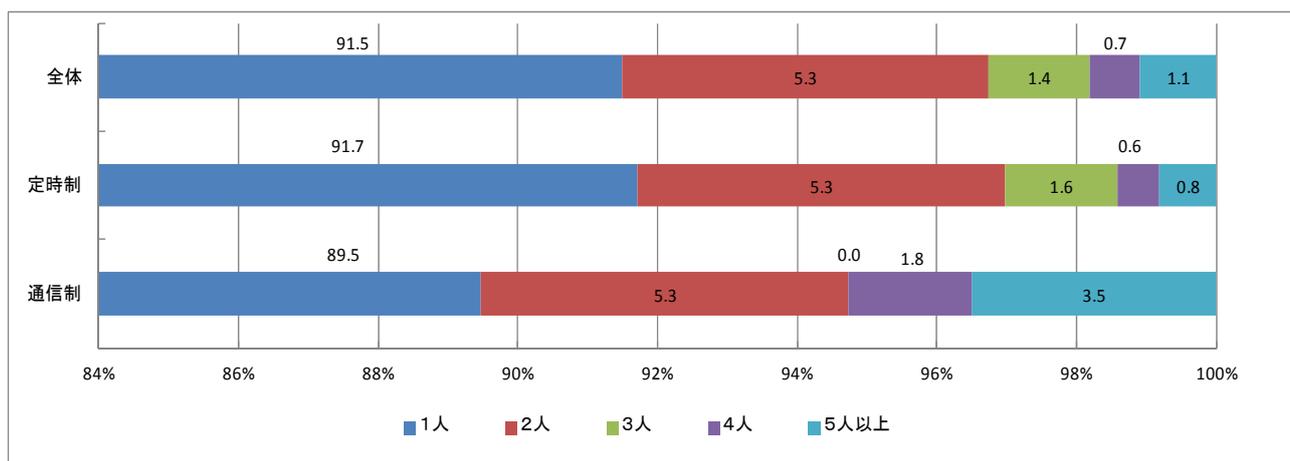
ソーシャルワーカーの配置は定時制・通信制課程共に皆無に等しく、非常に大きな課題であると考えられる。特に、支援を必要とされる生徒や通院をしている生徒が多く在籍している定時制・通信制課程では、教科担当教諭が空き時間等を利用して生徒の対応に当たっているのが現状である。この状況は一刻も早く改善されるべき重要課題である。

【1-11】特別支援教育コーディネーターの指名をしていますか。指名している場合、何人指名していますか

特別支援教育コーディネーターの指名をしている学校数

定時制課程 80.2% 通信制課程 44.2% 全体では 74.0%

1-9 図 特別支援教育コーディネーターについて



定時制課程では 80.2%、通信制課程では 44.2%、全体では 74.0%で特別支援教育コーディネーターを指名している。指名している学校の約 90%が 1名であり、組織的な活動にしていくためには特別支援教育コーディネーターの複数の指名が必要になると考えられる。また、特別支援教育コーディネーターの養成のための研修等も充実させる必要がある。

【1-12】三修制をとっていますか

表 2. 三修制状況

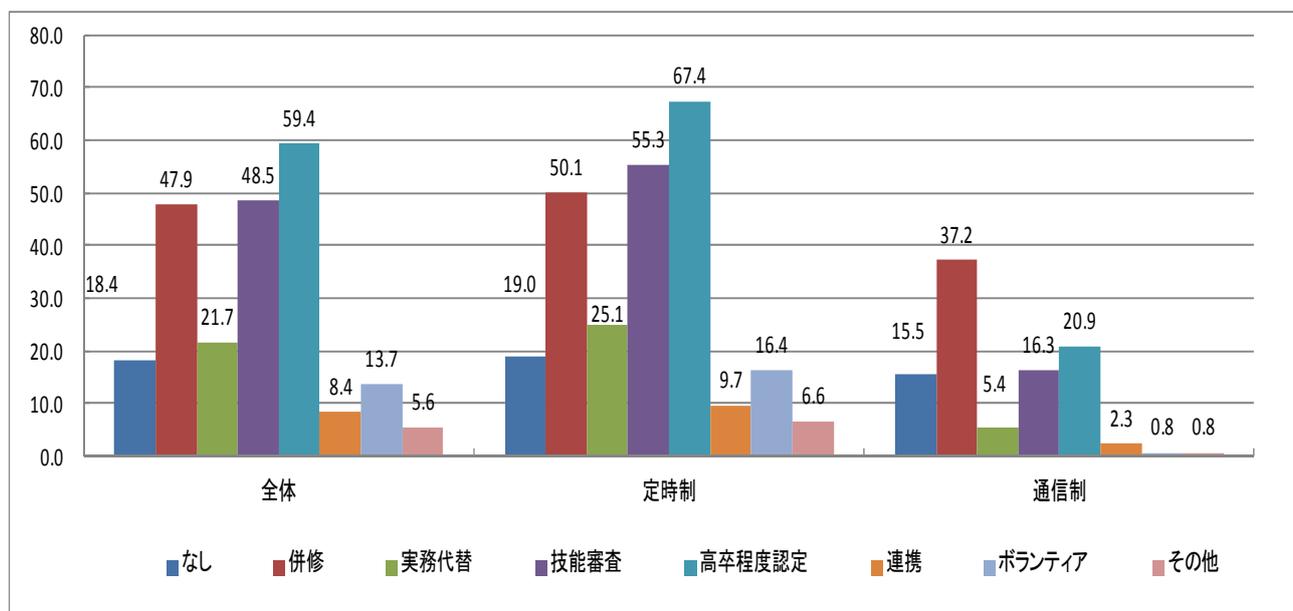
	定時制	通信制
実施校	434	91

定時制課程 70.3%、通信制課程 70.5%、全体 70.4%で三修制をとっている。これまでの勤労青少年のための夜間定時制課程が減少して、単独昼間定時制課程の設置、勤労青少年の減少等の様々な理由から、三年間の在籍で卒業したいという生徒からのニーズを反映していると考えられる。

【1-13】 学校外の学修による単位認定をしていますか（複数回答可）

- 1 行っていない 2 定通併修・定定併修等 3 実務代替
 4 技能審査 5 高校卒業程度認定試験の単位認定
 6 大学・専門学校等との連携 7 ボランティア活動 8 その他

1-10 図 学校外の学修による単位認定状況



定時制課程の 81.0%、通信制課程の 84.5%、全体で 81.6%が学校外の学修による単位認定を行っている。

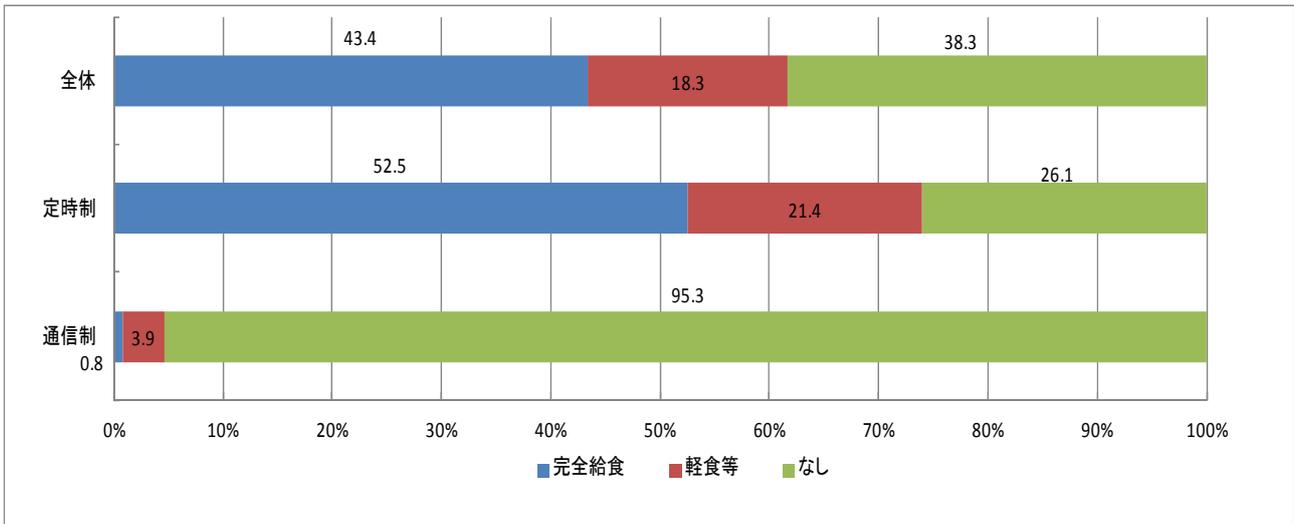
定通併修、技能連携、高等学校卒業認定資格試験等の活用が主たる学校外の単位認定であるが、その他の主な記述回答は以下のとおりである。

インターンシップ、スポーツ・文化活動における顕著な成果、各種検定、県市・社会教育施設が開催する講座や大学公開講座等インターンシップ等様々な外部機関と連携しその講座を活用している。ボランティア、スポーツ・文化活動における顕著な成果をあげた者への単位認定について、その認定基準に関心をもたれるところである。

【1-14】 給食はありますか

- 1 ある（完全給食） 2 ある（軽食または牛乳のみ） 3 なし

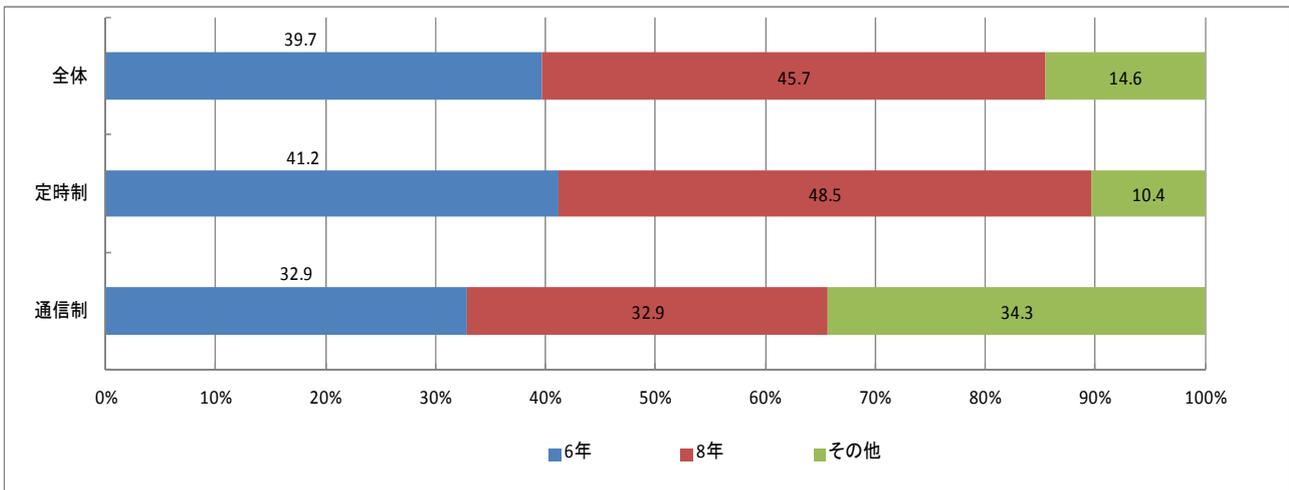
1-11 図 給食の状況



定時制課程において26.1%の学校で給食がないと回答しており、学校給食を実施している学校は50%強で、軽食または牛乳のみと併せると75%近くになっている。【項目8】で見られる栄養教諭の配置から見ても明らかなように、勤労青少年の夜間定時制課程の生徒にとっては唯一の食事になっている生徒もあり、食育指導の大切さが課題である。

- 【1-15】在籍年数 1 在籍年数を定めている 2 定めていない

1-12 図 在籍年数



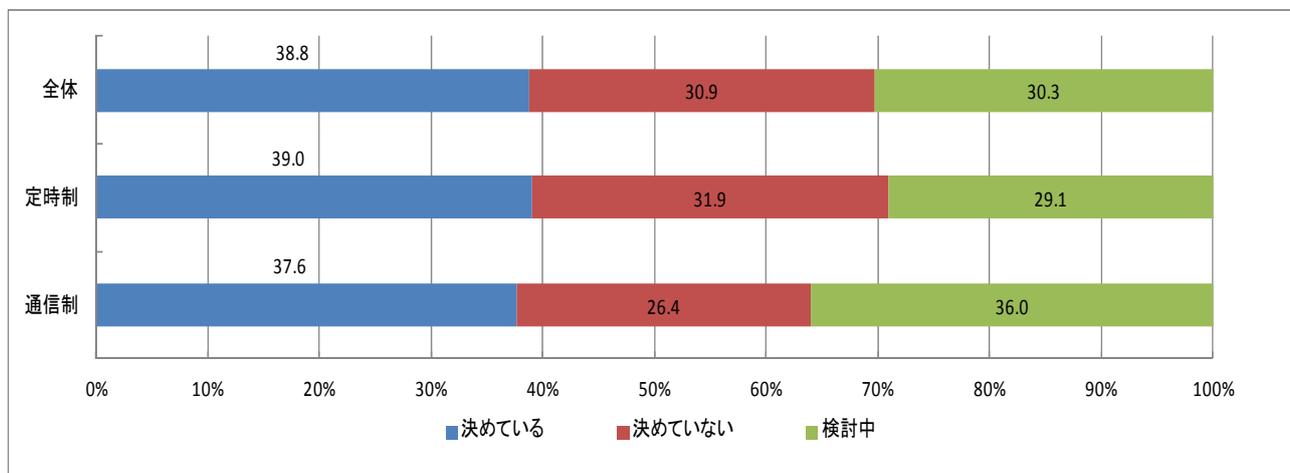
定時制課程 53.1%、通信制課程 54.3%、全体 53.4%で在籍年数を定めている。ほとんどが最大在籍年数を6年又は8年で、三修制導入で6年が多くなっている。

在籍年数を定めていないことで、在籍生徒数の管理に影響を与えているかどうかは不明であるが、時間を掛けて学びたいという通信制課程では在籍年数を決めることには課題が残る。

- 【1-16】停電等が発生した場合の生徒の安全対策について。

1 決めている 2 決めていない 3 検討中
 防災対策について、課題等のご意見をお書きください。

1-13 図 生徒の安全対策について



安全対策を決めている：264校、 検討中：206校、 決めていない：210校、

停電等災害が発生した場合の生徒の安全については、「安全対策を決めている」、「検討中である」、「決めていない」がそれぞれ約1/3に分かれていた。学校の設置や課程間で内容に差が見られた。夜間等の定時制課程では教室に備え付けの懐中電灯のみというところ、東日本大震災のような地震対策については学校単独では十分な安全対策が決められていない学校が多く見られた。交通機関が止まった場合の生徒の下校手段、校内宿泊の場合の食料、水、毛布等の備蓄については公的機関との連携が今後必要になる。全日制課程との併置校では連携が必要であり独自での対策は困難であるという意見が多くあった。今後は夜間部等での災害発生時に照明がない状態を想定した危機管理マニュアルの見直しが急がれる。

記述部分の主な回答は以下のとおりである。

(課題)

- ・生徒、家庭との連絡をどう確実にとるか。
- ・生徒の掌握、安全確保が確実にできるか不安。
- ・校舎の耐久性、老朽化対策工事が進んでいない。
- ・避難場所の確保、避難場所までの安全な誘導に不安。
- ・水、食料、暖房、防災グッズ等の準備が不十分。
- ・生徒を帰宅させる場合の適切な判断、手段、安全確保等の方法。
- ・教職員の人数が夜間は特に少なく、十分な対応ができない。
- ・防災マニュアルの作成、見直し。
- ・避難所になった場合の対応に不安。
- ・停電時の防災、避難訓練ができない。
- ・原発事故を想定した対応。
- ・メール一斉送信、HP活用の検討。

(既に実施していること)

- ・懐中電灯の全教室配備。
- ・夜間時の授業者の懐中電灯携帯。
- ・夜間避難訓練の実施。
- ・メール送信の業者委託、学校HPに緊急掲示板設置。

単位制の学校では、学年制と異なり生徒の管理が難しく単位制という自由な面がかえって災害等の発生時における連絡体制、生徒の状況確認・掌握という安全対策の基本的な部分で困難を生じることがある。

学校が安全な場所なのか、耐震面での不安が多い。また、海岸に近い学校では津波対策上の避難場所確保に苦慮している学校も多い。夜間時の学校外への避難は、交通事情や照明等の問題があり、避難場所の選定も含め学校だけでは対応が難しく、地域・関係機関と一体となった対策が必要である。

防災マニュアルの見直しを行っている学校が多い。生徒を学校に宿泊させること、学校が避難場所となることを前提とした見直しなど、地域全体を見渡したより実用的なものが必要である。原発が近くにある学校は、津波と同時に原発事故を想定した対応が求められているが、各学校においてもその対応方法は参考になる。

第1章 まとめ：

今回の生徒実態調査においては定時制課程655校、通信制課程149校、合計804校にアンケート調査の協力を求めたが、実際に回答のあった高等学校は739校、課程別に見ると定時制617課程、通信制129課程であった。この数は、ほぼ当振興会に加盟している学校数に相当するものである。

まず、学校の設置形態について見ると、全定併置校が59.4%を占め、次いで、定時制単独の単位制を採用している学校が15.3%となっている。通信制課程では通信制単独校、次いで定時制通信制併置校、全日制に併置された学校の順になっている。過去は全定併置が一般的で、いわゆる伝統校に通信制課程が併置されていたが、定通単独校へと変わりつつある。また、設置学科についてみると定時制課程では需要の多い普通科に次いで専門学科が多く設置されているのに対し、通信制課程では普通科がほとんどで、実技等を伴う専門学科の設置が難しいことが現れている。

次に、単位制の採用状況について見ると、昭和62年12月高等学校定時制通信制教育検討会議において「高等学校定時制通信制教育の改善」報告が出され、翌年3月学校教育法施行規則改正で単位制高等学校が定時制通信制課程で創設され、全国で岩手県立杜陵高校、長野県立松本筑摩高校、石川県立金沢中央高校の3校が名乗り出て施行された。その後、単位制への切り替えを行う学校が年と共に増加し、特に、単位の認定等の都合で単位制を採用している通信制課程が多くなって、平成11年3月時点では定通併せて169校が単位制を採用していた。現在では、定時制課程では269校、通信制課程では121校となっている。単位制の実施に伴い、三学期制から二学期制に学期の変更をする学校が増加し、定時制課程では三学期制を採用している学校は56.7%、二学期制を採用している学校は42.9%と平成10年度に行った前回の調査と比較すると、二学期制は大きく伸びて来ている。通信制課程では単位の認定の関係もあり半期で単位の認定等が行われる二学期制を採用しているところが80.3%と圧倒的に多く採用されている。

養護教諭等についての配置について見ると、定時制課程では81%、通信制課程では41.9%の配置

しかなく、定時制 19.1%、通信制 59.1%で配置がされていない。様々な心身の健康上の課題をもった支援を要する生徒が多く在籍する定時制・通信制においては、非常に大きな課題として取り上げられる必要があり、この状況は一刻も早く改善されるべき重要課題である。また、司書教諭、実習教諭、栄養職員、実習助手等についてみても、通信制課程では司書教諭は 13.4%程度の配置に対し、定時制課程では司書教諭が 9.9%の配置しかない。他実習教諭、実習助手の配置が 16.7%及び 31.2%となっている。栄養教諭が 10%弱しか配置されていない。

ソーシャルワーカーの配置は定時制通信制課程共に数%しかなく、支援を必要とされる生徒や通院をしている生徒が多く在籍している定時制通信制課程では、教科担当教諭が空き時間等を利用して生徒の対応に当たっているのが現状である。この状況は一刻も早く改善されるべき重要課題である。

特別支援教育コーディネーターの指名については、定時制では 80.2%、通信制では 44.2%、全体では 74.0%で少なくとも 1 名は指名している。組織的な活動にしていくためには特別支援教育コーディネーターの複数の指名が必要になると考えられる。

昭和 63 年 11 月学校教育法の改正に伴い、高等学校定時制・通信制課程の修業年限が(平成元年 4 月 1 日施行)「3 年以上」に弾力化され全日制課程と同様、3 年で卒業が認められることとなった三修制の実施状況を見ると、10 年前から大幅に実施校が増え、定時制 70.3%、通信制 70.5%、全体 70.4%で三修制を実施している。これまでの勤労青少年のための夜間定時制課程が減少して、単独昼間定時制の設置、勤労青少年の減少等の様々な理由から、三年間の在籍で卒業したいという生徒からのニーズを反映していると考えられる。このため、定通併修、技能連携、高等学校卒業認定資格試験等の活用が主たる学校外の単位認定であるが、その他の主な単位認定としては、インターシップ、スポーツ・文化活動において顕著な成果、各種検定、縣市・社会教育施設が開催する講座や大学公開講座等や様々な外部機関と連携しその講座を活用している。ボランティア、スポーツ・文化活動で顕著な成果をあげた者への単位認定について、その認定基準に関心をもたれるところである。

在籍年限については、定時制 53.9%、通信制 54.3%、全体 53.9%で在籍年数を定めている。ほとんどが最大在籍年数を就業年数の 2 倍の 6 年又は 8 年で、三修制導入で 6 年が多くなっている。勤労青少年の多くが学ぶ夜間定時制課程での給食の配食状況については、学校給食を実施している学校は 50%強で、軽食または牛乳のみと併せると 75%近くが実施していることになる。

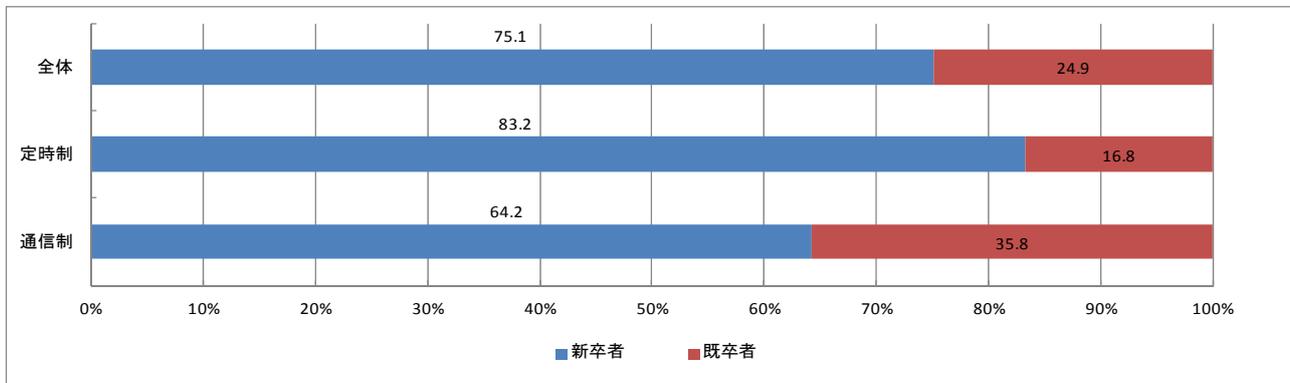
最後に生徒の安全対策について、安全対策を決めている学校 264 校、決めていない学校 210 校、現在検討中という学校 206 校でほぼ 1/3 に分かれ、内容については学校の設置や課程間で差が見られた。

第 2 章 生徒の実態についての調査

(管理職の先生方に回答していただいたアンケート項目の結果は、以下のとおりである。)

【2-1】本年度入学生の内訳について

2-1 図 入学生の内訳について



入学生の新卒・既卒割合について見ると、新卒者の占める割合が75%を超えている。また、新卒入学者数は定時制課程の方が多く全体の83.2%を占めているのに対し、通信制課程が64.2%である。以前は中学校卒業と同時に就職をして翌年度に定時制高校に入学をする勤労青少年の学びの場として考えられていた定時制課程に対し、現在では全日制課程と同じように中学校卒業と同時に定時制課程、通信制課程に入学する生徒が多くなっている。

【2-2】昨年度の転・編入学の状況について

表3. 転・編入学の状況について

		1年 (次)	2年 (次)	3年 (次)	4年 (次)	無学年
転入学		1757	3294	2629	806	2087
編入学		642	1457	1128	286	1316
合計		2396	4765	3772	1097	3403
前籍校の課程	全日制	1738	3338	2333	569	2909
	定時制	203	338	236	77	253
	通信制	83	168	148	317	296
その他(外国の学校等)		12	20	23	5	4

転・編入学者について見たものが上表である。1年次では全日制課程からの転・編入学生は72.5%、2年次で70.0%、3年次で61.9%、4年次で51.9%と年次を追って減少はしている。

定時制・通信制への転・編入学者は、学年を追う毎に数値は減少しているが、2年次の転・編入学生が多くなっているのは1年間の結果が出たところでの進路変更と考えられる。いずれにしても転・編入学者のほとんどは全日制課程からの生徒である。定時制・通信制課程は全日制課程の生徒の駆け込み寺的存在となっている事を示している。今後、全日制課程を含めた高校教育の内容等について一層の検討と柔軟な対応が求められるものと考えられる。

【2-3】在籍生徒の年齢構成について

表 4. 在籍生徒の年齢構成について

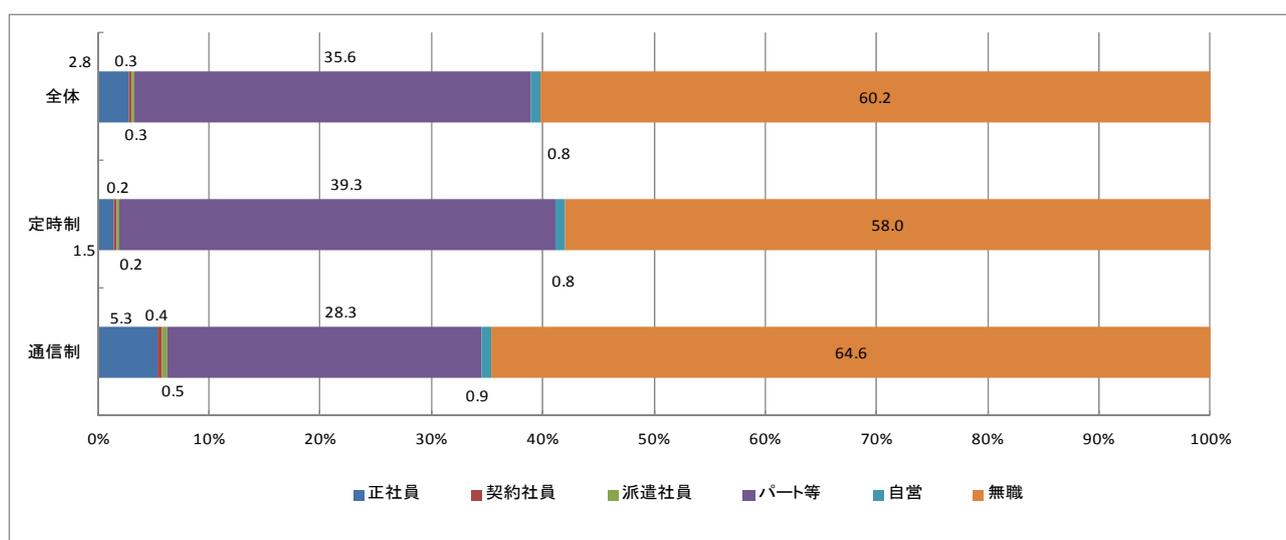
	1年 (次)	2年 (次)	3年 (次)	4年 (次)	無学年
15歳	30665	2	0	0	5620
16歳	8810	29483	141	6	7513
17歳	3206	8955	27677	460	8691
18歳	1834	2971	8590	9017	4974
19歳	1301	1516	2961	3798	2775
20歳	1103	1070	1453	1826	2056
21～25	3127	2612	2840	2816	5446
26～30	1383	1042	1180	1045	2244
31～35	358	318	430	452	662
36～40	230	204	231	302	410
41～50	192	203	190	165	211
51以上	262	237	234	276	209
合計	52462	48589	45914	20137	40811

在籍生徒の年齢構成について調査をしたものが表 4 である。

在籍生徒の年齢については、現役入学生が 1 年次で 58.5%、2 年次が 60.8%、3 年次では 60.3%、4 年次で 44.8% である。これに対し 30 歳以上の生徒では定時制通信制課程共に年ごとに減少している。多くの無学年制を採用している通信制課程でも新卒業生の入学が多くなっている。

【2-4】生徒の就業状況について

2-2 図 生徒の就業状況について



ここに示した生徒の就業状況については、学校ではっきり把握している生徒数のみであり、多くの学校では生徒の就業状況を正確に把握しきれない状況と言える。特に、通信制課程では定時

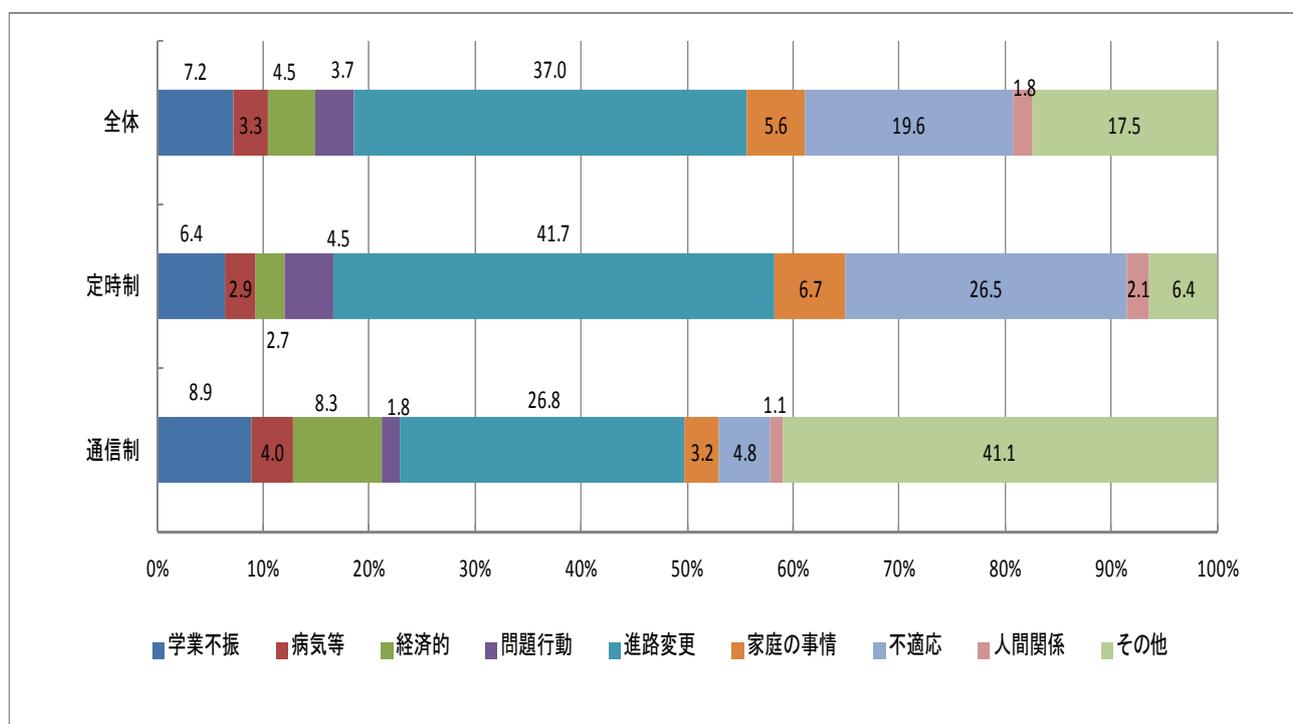
制課程に比べ生徒数も多く、定時制課程と異なり毎日面接・授業を実施していないこともあって、生徒の就業状況をはじめ生徒の行動については掌握が極めて難しい状況と言える。

この調査に回答が寄せられた数値で、生徒の就業状況について見ると、定職に就いている者は、定時制 1.5%、通信制 5.3%、全体で見ると約 3%である。パート・アルバイト等が 35.6%、60%以上が無職という状況である。在籍している生徒の年齢構成からみても当然の数値であるが、勤労青少年のための定時制通信制課程というこれまでの考え方を大きく変え、今後は、勤労青少年のための定時制通信制課程という使命についてはどのように考えていくべきかが重要な課題である。

【2-5】退学の時期及び事由について（平成22年度）

退学者数 16,687名 / 222,679名（22.5.1現在在籍数）

2-3図 生徒の退学について



退学者率は、定時制 11.3%、通信制 4.4%、全体 7.5%であった。退学理由については、定時制では進路変更、学校不適応という理由で退学する生徒が多く、通信制では進路変更に次いでその他が多くなっている。平成10年の調査では、高校生活に熱意がない、授業に興味を湧かない、仕事の都合という理由が上位を占めていた。今回の調査では定時制で進路変更に学業不振等が含まれているものと考えられる。また、問題行動から退学に至る生徒は比較的少ないのは、定時制高校では問題行動から即、退学ではなく教職員による丁寧な指導が行われていることが明白である。通信制課程ではその他の中に高等学校卒業程度認定試験等による単位取得で退学する生徒が含まれる。又、定時制通信制課程共に家庭の事情や病気、経済的理由からの退学が比較的多く、経済的、心身の支援を要する生徒がいかに多いかが伺われる。

【2-6】小・中学校における不登校経験がある生徒はどの位いますか

アンケート調査の結果、定時制課程に学ぶ生徒の3人に1人は何らかの理由で小学校や中学校から不登校を経験している。課程別では、定時制課程には31.3%、通信制課程には14.6%で定時制課程には通信制課程の約2倍の不登校経験者が挑戦していることになる。不登校経験者にとっては、定時制課程に籍を置いて毎日通学して直接先生に指導を受けることの方が容易であり、通信制課程において自力での単位修得がいかに困難であるかが判る。

表5. 生徒の状況について

	不登校経験		外国籍	
	人数	割合	人数	割合
全体	48,439	21.8%	3,771	1.7%
定時制	31,313	31.3%	3,013	3.0%
通信制	17,126	14.6%	758	0.6%

【2-7】外国籍の生徒数

外国籍の生徒は全体としては、3,771名（1.7%）と比較的少ないが、日本語を十分理解できない生徒も在学しているので学校現場では大変な労力を費やしていると推察される。通信制課程に比して不登校経験者と同じく外国籍の生徒が定時制課程に多く生徒が在学していることは、直接面接授業を受けた方が単位の修得ができるからと考える。

【2-8】母子家庭の生徒数（未成年）

【2-9】父子家庭の生徒数（未成年）

【2-10】保護者が両親以外の生徒数（未成年）

表6. 生徒の家庭環境について

	母子家庭		父子家庭		保護者両親以外	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合
全体	34,025	23.5%	6,475	4.5%	1,931	1.4%
定時制	27,268	26.5%	4,955	4.9%	1,630	1.6%
通信制	6,757	16.1%	1,520	3.6%	301	0.7%

生徒の家庭環境について調査をしたのが第6表である。表から未成年で母子家庭の生徒は、定時制で26.5%、通信制の生徒では16.1%で約2.4割の生徒が母子家庭である。また、父子家庭についてみると定時制では4.9%、通信制では3.6%であった。2.5人に1人は母子家庭又は父子家庭に育つ生徒で比較的経済的に恵まれない経済的困窮家庭の生徒が在学していると考えられる。

未成年者で両親以外の保護者に養育されている生徒の数は、回答を寄せられた在籍生徒数で見ると数値は小さいが困難な家庭環境にあることは否めない。

前述の母子家庭、父子家庭と併せて定時制通信制に在籍する生徒の多くは、勤労青少年と言われた時代から、今は働きたくても働けない生徒、働きたくても働く場所がない生徒など経済的に困窮した家庭からの生徒であるといえる。

【2-11】特別な支援を必要とする生徒はどの位いますか

表 7. 特別な支援等について

	特別な支援		学習障害		発達障害	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合
全体	13,503	7.6%	3,905	2.4%	6,321	3.6%
定時制	7,103	7.0%	2,890	2.9%	4,283	4.0%
通信制	6,400	8.5%	1,015	1.5%	2,038	3.0%

回答校の在籍生徒数で見ると、特別な支援を要する生徒は、全体では 7.6%の生徒が在学していることになる。その内訳については、定時制課程では 7,103 名、7.0%、通信制課程では 6,400 名、8.5%という数値をしめしている。これは毎日の通学が困難な生徒で多くは全日制の入学が困難なため定時制課程なり通信制課程を選択しているものと考えられる。

定時制課程で 7.0%、通信制課程で 8.5%の特別な支援を要する生徒が在学しているということは、現実に一般の生徒指導に与える影響は極めて大きいと考えられる。

【2-12】学習障害のある生徒はどの位いますか

特別支援を要する生徒の内、学習障害を有する生徒は表 7. に示されている。定時制で 2.9%、通信制で 1.5%である。定時制課程で 2.9%の学習障害を有する生徒に費やす労力は大変なものである。

【2-13】発達障害のある生徒はどの位いますか

在校生の発達状況（支援を要する生徒・学習障害・発達障害）について調査したものが表 7 である。第 1 章でも触れたが、特別な支援を要する生徒は定時制課程で 4.0%、通信制課程で 3.0%が在籍している。その内訳として、学習障害を有する在校生は定時制で 2.9%、通信制で 1.5%であった。更に、発達障害のある生徒は定時制で 4.0%、通信制で 3.0%が在籍している結果になった、学校によっては、特別支援を必要とする生徒が 10 数%になっているところも報告されている。

【2-14】心療内科等に通院歴、療育手帳・障害者手帳等の手帳を取得している生徒はどの位いますか。

表 8. 生徒の通院歴、療育手帳・障害者手帳等の手帳を取得状況

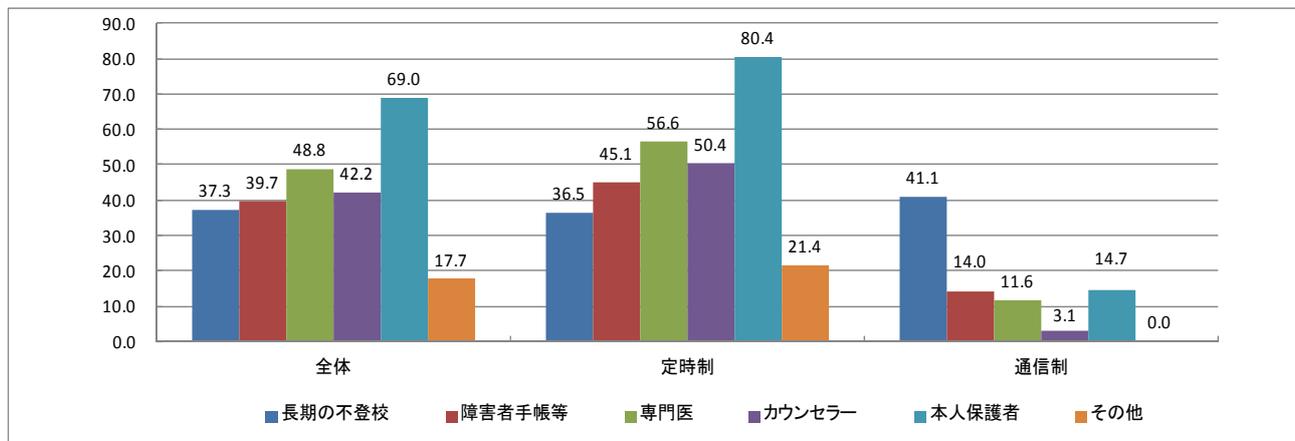
	通院歴		手帳の取得	
	人数	割合	人数	割合
全体	8,878	5.3%	1,475	0.9%
定時制	5,039	5.0%	902	0.9%
通信制	3,839	5.6%	573	0.8%

在校生の心身の障害についての調査結果が表 8 である。通院歴のある生徒は定時制で 5.0%、通信制で 5.6%在学しており、療育手帳・障害者手帳等の手帳を取得している生徒は表から約 1%が在籍していることが解る。いずれにしても定時制通信制課程に在学している生徒の 6%弱は通院歴を持つか手帳の取得者である。

【2-15】特別な支援を必要とする生徒はどのようにして判断していますか（複数回答可）

- 1 長期にわたる不登校経験 2 障害者手帳等 3 専門医の判断

2-4 図 特別な支援を必要とする生徒の判断方法



その他の主な記述は以下のとおりである。

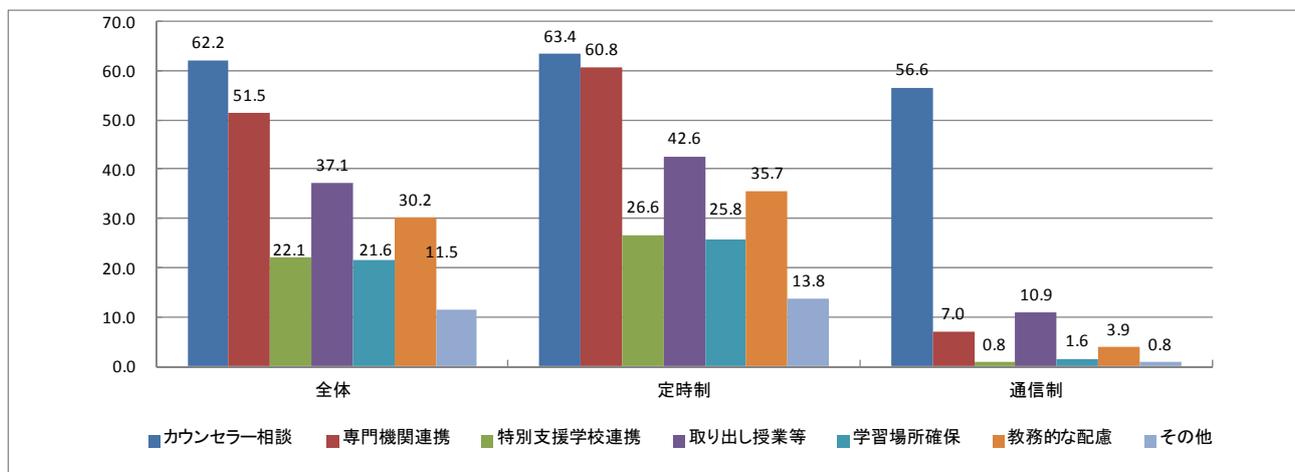
- ・ 中学校、前籍校からの情報
- ・ 入学後の本人の状況や授業中の様子。教職員の観察。
- ・ 担任の状況判断
- ・ 校内の相談組織や委員会で判断。
- ・ 外国籍の生徒、日本語を母国語としない生徒等。

特別な支援を必要とする生徒というと、発達障害等のある生徒に関心が向くが、前述の表5からも外国籍の生徒、日本語を母国語としない生徒等への支援も大きな比重を占めていると推察される。

【2-16】特別な支援の具体的な内容は何ですか（複数回答可）

- 1 カウンセラー等との相談
- 2 専門機関との連携
- 3 特別支援学校との連携
- 4 個別補習等の取り出し
- 5 個別学習場所の確保
- 6 教務的な配慮
- 7 その他

2-5 図 特別な支援の具体的な内容



カウンセラー等との相談 4 5 6 件

専門機関との連携 3 7 8 件

特別支援学校との連携	163件
個別補習等の取り出し	273件
個別学習場所の確保	157件
教務的な配慮	220件
その他	83件

その他の主な記述は以下のとおりである。

- ・地域NPO法人や就労訓練施設等との連携
- ・非常勤職員の配置
- ・「個別の教育支援計画」に基づく支援
- ・日本語を母国語としない生徒向けの取り出し授業

【2-17】特別な支援を必要とする生徒への指導について、特色ある取り組みをしている場合はお書きください（自由記述）

- ・外部の人を交えた生徒に関する情報交換会、ケース会議、特別支援教育に関する研修を実施。
- ・「個別の教育支援計画」を作成し活用。
- ・委員会や支援チームを作り、特別な支援を必要とする生徒に組織的に対応。
- ・特別支援学校のセンター的機能の活用や教育委員会、医療機関、児童相談所、地域生活支援センターとの連携。
- ・臨床心理士などの専門員派遣事業の活用。
- ・就業のための障害者支援センター・障害者支援団体との連携、NPO法人・サポートステーションとの連携、雇用主との連携で正規雇用を目指す。
- ・大学(院)との連携をはかり、大学(院)生のボランティア活用。
- ・授業のユニバーサルデザイン化。
- ・ソーシャルスキルトレーニングの導入。

第2章 まとめ：

在籍生徒は、新卒者の占める割合が75%を超えている。また、新卒入学者数は定時制課程の方が多く全体の83.2%を占めているのに対し、通信制課程が64.2%である。このことは従来からの勤労青少年の学びの場として考えられていた定時制課程に対し、全日制課程と同じように中学校卒業と同時に定時制課程、通信制課程に入学する生徒が多くなってきているといえる。これは、勤労青少年以外の生徒、例えば、全日制課程への入学が困難な特別支援を要する生徒や地方では学校の統廃合により通学困難な生徒が、家業の手伝いやアルバイトをしながら時間的に制約の少ない定時制課程を選ぶ傾向があることを示しているのではないだろうか。通信制課程については、年ごとに若年化してきている。

生徒の転・編入学について見ても、1年次では全日制課程からの転・編入学生は72.5%、2年次で70.0%、3年次で61.9%、4年次で51.9%と年次を追って減少はしている。2年次の転・編入学生が多く見られるが、1年間の結果が出たところでの進路変更とも考えられる。いずれにしても

転・編入学者の多くは全日制課程からの生徒である。

在籍生徒の年齢については、現役入学生が1年次で58.5%、2年次が60.0%、3年次では60.3%、4年次で44.8%である。これに対し30歳以上では定時制通信制課程共に減少気味である。多くの無学年制を採用している通信制課程でも新卒業生が多くなっている。

この調査に回答が寄せられた数値で、生徒の就業状況について見ると、定職に就いている者は、定時制1.5%、通信制5.3%、全体2.8%である。パート・アルバイト等が35.6%であり、60%以上が無職という状況である。在籍している生徒の年齢構成からみても当然の数値であるが、勤労青少年のための定時制通信制高校という従来の考え方が大きく変わってきているといえる。また、多くの学校では生徒の就業状況を正確に把握しきれていない状況もあるようである。特に、通信制課程では定時制課程に比べ生徒数が多く、定時制課程と異なり毎日面接授業を実施していないこともあって、生徒の就業状況をはじめ生徒の行動については把握が極めて難しい状況と言える。

退学者率は、定時制11.3%、通信制4.4%、全体7.5%であった。退学理由については、定時制では進路変更、学校不適応という理由で退学する生徒が多く、通信制では進路変更に次いでその他が多くなっている。問題行動から退学に至る生徒は比較的多くはないが、定時制高校では問題行動があった場合も即、退学にするのではなく教職員による丁寧な指導が行われることがうかがえる。通信制課程では「その他」の中には、高等学校卒業程度認定試験等による単位取得で退学をする生徒が含まれる。また、定時制通信制課程共に家庭の事情や病気、経済的理由からの退学が比較的多く、経済的、心身的な支援を要する生徒が如何に多いかがうかがわれる。

アンケート調査の結果、定時制通信制高校に学ぶ生徒の3人に1人は何らかの理由で小学校や中学校から不登校を経験した生徒が在学している。課程別では、定時制には31.3%、通信制課程には14.6%で定時制課程には通信制課程の約二倍の不登校経験者が再挑戦していることになる。不登校経験者にとっては、定時制課程に籍を置いて毎日通学して直接先生に指導を受けることの方が容易である。また、外国籍の生徒は全体としては、3,713名(1.7%)と比較的数的には少ないが日本語を十分理解できない生徒も在学しているので学校現場では大変な労力を費やしていると推察される。

生徒の家庭環境等について調査した結果、未成年で母子家庭の生徒は、定時制で26.5%、通信制の生徒では16.1%で2.5人に1人の生徒が母子家庭である。父子家庭の生徒は4.9%と数値としては小さいが、母子家庭と合わせたひとり親の家庭環境に育つ生徒は30%を超えていることが解る。更に、未成年者で両親以外の保護者に養育されている生徒の数は、回答を寄せられた在籍生徒数で見ると数値は小さいが、困難な家庭環境にある。定時制通信制高校に通学する生徒の約16%は母子家庭又は父子家庭、未成年者で両親以外の保護者に養育されている生徒で、比較的経済的に恵まれていない経済的困窮家庭の生徒であると考えられる。

生徒の教育環境についてのアンケートの結果は、特別な支援を要する生徒は、全体では7.6%在学していることになる。その内訳については、定時制課程では7,103名、7.0%、通信制課程では6,400名、8.5%である。これは全日制高校への入学が困難な生徒は定時制課程に、毎日の通学が困難な生徒の多くは通信制課程を選択しているものと考えられる。また、特別支援を要する生徒の内、学習障害のある生徒は表7(P19)に示されている。定時制で2.9%、通信制で1.5%である。

また、学習障害を有する在校生は定時制で2.9%、通信制で1.5%であった。更に、発達障害のある生徒は定時制で4.0%、通信制で3.0%が在籍している。学校によっては、特別支援を必要とする生徒が10数%になっているところも考えられる。

在校生の心身の障害について調査した結果、通院歴のある生徒は定時制で5.0%、通信制で5.6%

在学しており、療育手帳・障害者手帳等の手帳を取得している生徒は表7から約1%が在籍していることが解る。いずれにしても定時制通信制課程に在学している生徒の6数%は何らかの障害を有していると考えられる。

特別な支援を必要とする生徒の判断方法としては、主として1長期にわたる不登校経験、2障害者手帳の取得等、3専門医の判断、4カウンセラーの意見、5本人・保護者の申告、6その他で、その他の意見として、主に中学校、前籍校からの情報、入学後の本人の状況や授業中の様子、教職員の観察、担任の状況判断、校内の相談組織や委員会で判断、外国籍の生徒、日本語を母国語としない生徒等である。

特別な支援の具体的な内容については、1. カウンセラー等との相談(456件)、2. 専門機関との連携(378件)、3. 特別支援学校との連携(163件)、4. 個別補習等の取り出し(273件)、5. 個別学習場所の確保(157件)、6. 教務的な配慮(220件)、7. その他のもの(83件)としては、地域NPO法人や就労訓練施設等との連携、非常勤職員の配置、「個別の教育支援計画」に基づく支援、日本語を母国語としない生徒向けの取り出し授業等である。

最後に特別な支援を必要とする生徒への指導について、

- ・外部の人を交えた生徒に関する情報交換会。
- ・ケース会議。
- ・特別支援教育に関する研修を実施。
- ・「個別の教育支援計画」を作成し、活用。
- ・委員会や支援チームを作り、特別な支援を必要とする生徒に組織的に対応。
- ・特別支援学校のセンター的機能の活用。
- ・教育委員会、医療機関、児童相談所、地域生活支援センターとの連携。
- ・臨床心理士などの専門員派遣事業の活用。
- ・就業のための障害者支援センター。
- ・障害者支援団体との連携。
- ・NPO法人・サポートステーションとの連携。
- ・雇用主との連携で正規雇用を目指す。
- ・大学(院)との連携をはかり、大学(院)生のボランティア活用。
- ・授業のユニバーサルデザイン化。
- ・ソーシャルスキルトレーニングの導入。

など、各学校に於いて様々な工夫を凝らし大変なご苦勞をされていることがわかる。

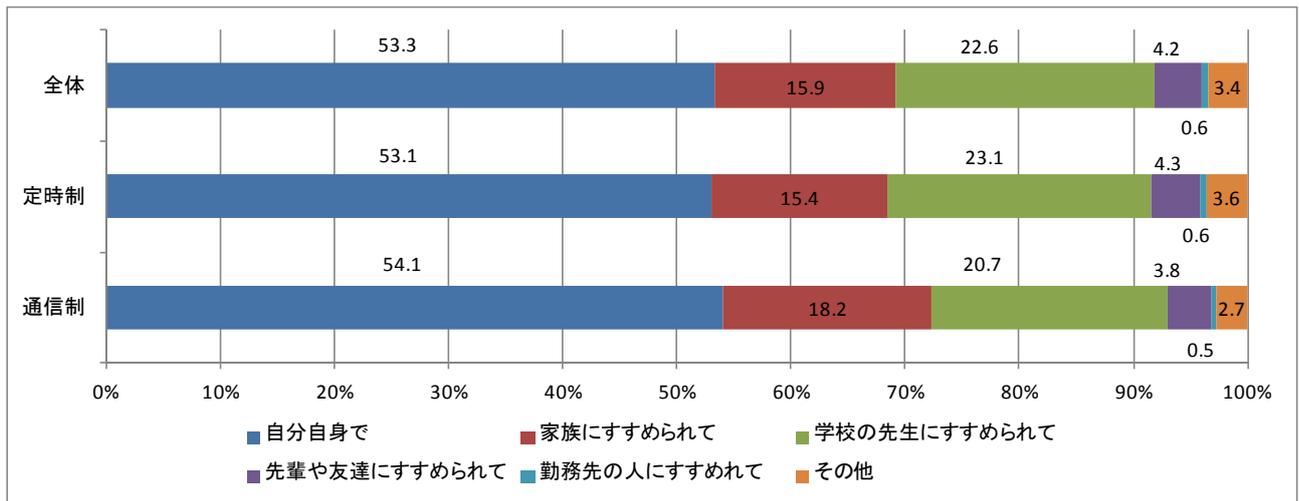
第3章 生徒の意識調査について（生徒に直接質問をして回答を得た結果である）

生徒対象のアンケートの集計結果は次のとおりである。

【3-1】 高等学校に入学することをどのようにして決めましたか

- 1 自分自身で 2 家族にすすめられて 3 学校の先生にすすめられて
4 先輩や友達にすすめられて 5 勤務先の人にすすめられて 6 その他

3-1 図 高等学校に入学することをどのようにして決めましたか



定時制課程への入学の決定については、約半数強の生徒が自分自身と答えている。家族や学校の先生の勧めも合計で 38.5% となり、大きな割合を占めている。それに比べて先輩や友人の割合が少ないと思われる。入学前の対人関係の希薄さがうかがえる。

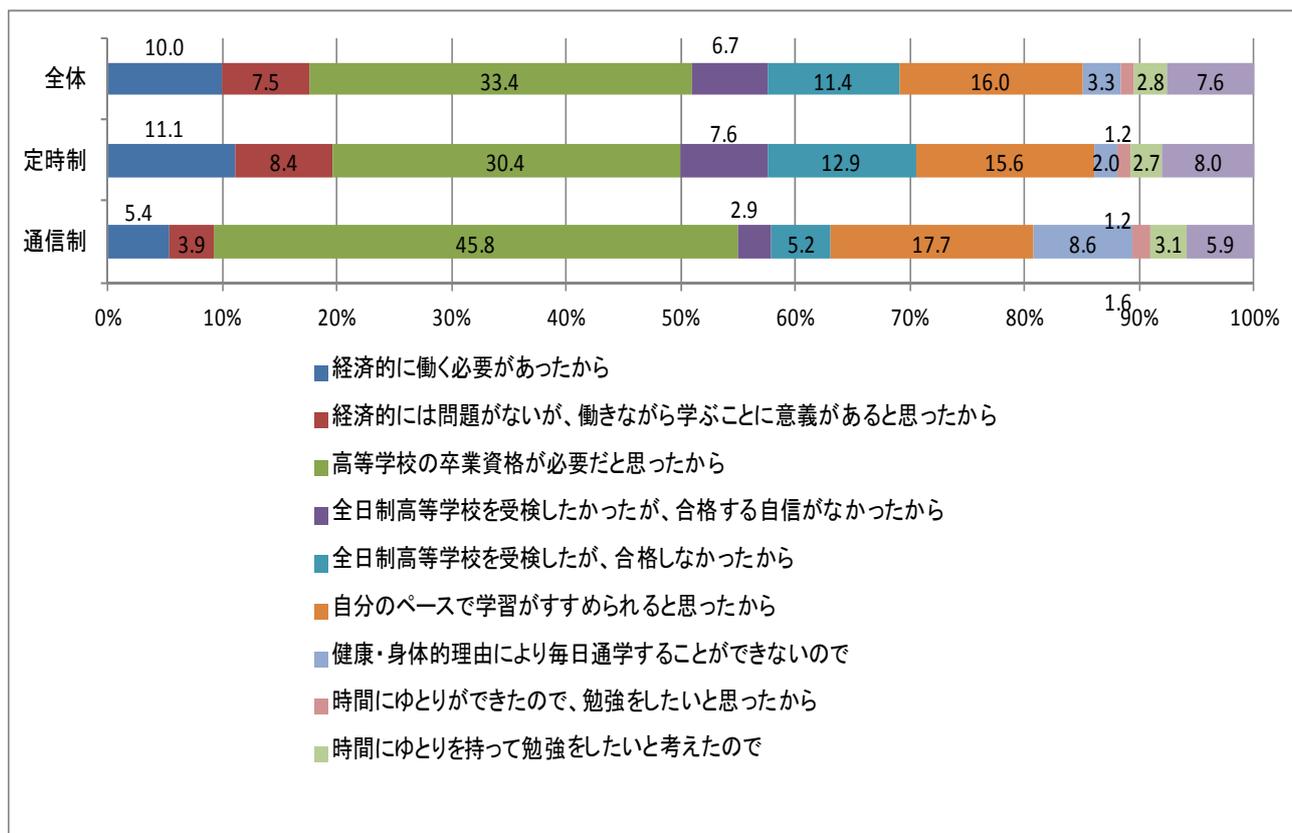
勤務先の人が少ないのは、勤労者の割合が低いためだと考えられる。その他の中には、保護司や青少年センター等の公的機関に勧められたとの回答も含まれているが、家族や学校の先生等に「勝手に決められた」という後ろ向きの回答も多く見られた。

通信制課程への入学の決定については、定時制課程の生徒とほぼ同様な結果であるが、家族の勧めの割合が定時制に比べ若干高い。これは学校の先生より身近にいる家族の方が相談しやすい点が考えられる。

【3-2】 定時制高等学校に入学した動機・理由は何ですか

- 1 経済的に働く必要があったから
- 2 経済的には問題がないが、働きながら学ぶことに意義があると思ったから
- 3 高等学校の卒業資格が必要だと思ったから
- 4 全日制高等学校を受検したかったが、合格する自信がなかったから
- 6 自分のペースで学習がすすめられると思ったから
- 5 全日制高等学校を受検したが、合格しなかったから
- 7 健康・身体的理由により毎日通学することができないので
- 8 時間にゆとりができたので、勉強をしたいと思ったから
- 9 時間にゆとりを持って勉強をしたいと考えたので
- 10 その他

3-2 図 定時制高等学校に入学した動機・理由



「時間にゆとりができたので入学した」という回答は、仕事や家事が一段落しての入学であると推測できる。従前からの仕事や家事が一段落してからの社会人の学び直しの率が 1%強であることがわかる。

「卒業資格が必要である」が定時制課程で 30.4%、通信制課程では 45.8%を示している。この内容として、従前のような社会人として苦勞の結果高等学校に入学した人と中学校卒業後に『高卒の資格ぐらゐは取れ』と言われて入学した人の 2通りが含まれていると考えられる。

定時制課程で「全日制課程に合格しなかったから」という回答が 12.9%あり、最後の砦として定時制課程を必要としている生徒は 1割強いることを示している。

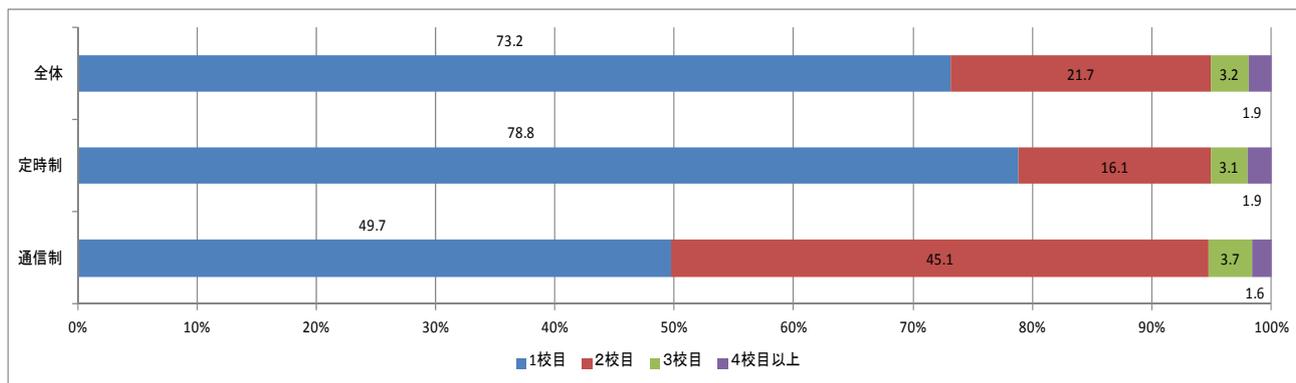
これに対し「自分のペースで学習できるとゆとりを持って学習したい」を合わせると定時制課程・通信制課程共に 23.6%となる。ゆっくり丁寧な授業を期待して入学した生徒が多いこともわかる。

通信制課程に入学した生徒の半数近くが「卒業資格が必要」を選んでいる。これは、高校を卒業したいが様々な理由あるいは進路変更により通信制課程を選んだ生徒を多く通信制高校に受け入れている結果と考えられる。

【3-3】 現在の学校は何校目ですか

- 1 1校目 2 2校目 3 3校目 4 4校目以上

3-3 図 現在の学校は何校目



定時制課程で1校目である生徒が8割近くいる。1校目の中には中学校卒業後時間をおいての入学も考えられる。2校目の生徒も入れると95%近くに達する。学び直しというより全日制課程からの受け皿としての役割が大きいと推測できる。

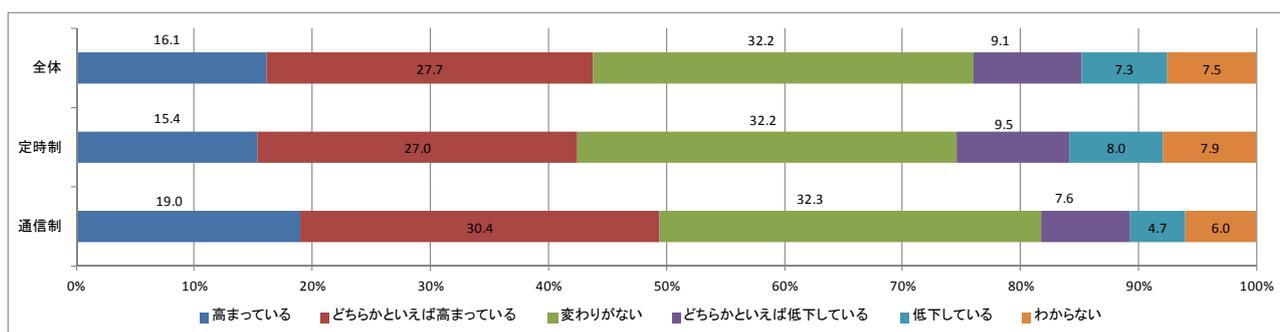
但し、4校以上という生徒も絶対数では562名に達するので、学校の抽出調査という点から考えれば必ずしも少ない人数と割り切ることができない。それらの生徒に対しては、特にキャリア教育を視野に入れた進路指導やカウンセリング等のケアが必要な生徒が多いと推測できる。

通信制課程で1校目という生徒と2校目という生徒がほぼ同じくらいの割合になっている。これは、進路変更や体調等の理由により、学校を変更するときに通信制が受け皿になっていることから1度の変更で卒業に向けて進んでいると考えられる。

【3-4】 学習に対する意欲は、入学したときと比べるとどう変わっていますか

- 1 高まっている 2 どちらかといえば高まっている 3 変わらない
4 どちらかといえば低下している 5 低下している 6 わからない

3-4 図 学習に対する意欲は、入学したときと比べるとどう変わっていますか



全体では、意欲が高まっている方向の生徒は、合わせて43.8%である。そのまま変わらない生徒も32.2%いる。低下している生徒の割合は、16.4%であり、少ない数値とは言えない。

定時制課程では生徒指導の問題点が強調されがちであるが、学習内容の精選や指導法の工夫など小中学校での指導内容を念頭に置いた学習指導面での強化が必要である。特に、夜間定時制課程ではクラスの人数が少ない学校も多く、教員の教科指導力について全日制課程と違った工夫が求められる。

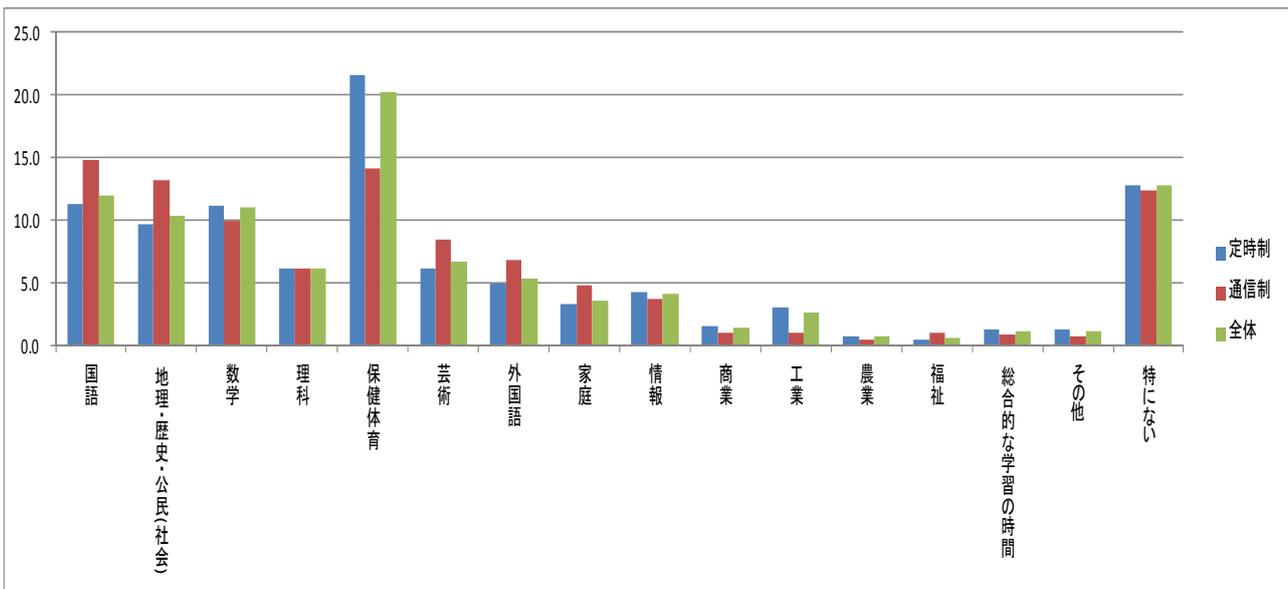
通信制課程では自宅での学習・レポート作成など、学習する本人の意志が強くないと継続できな

い状況にあるため、意欲が高まっている方向の生徒が半数近くになっている。

【3-5】 次の教科等のうち、あなたがA：最も好きなものはどれですか、また、B：最も苦手なものはどれですか

- 1 国語 2 地理・歴史・公民(社会) 3 数学 4 理科 5 保健体育
 6 芸術 7 外国語 8 家庭 9 情報 10 商業 11 工業
 12 農業 13 福祉 14 総合的な学習の時間 15 その他 16 特にない

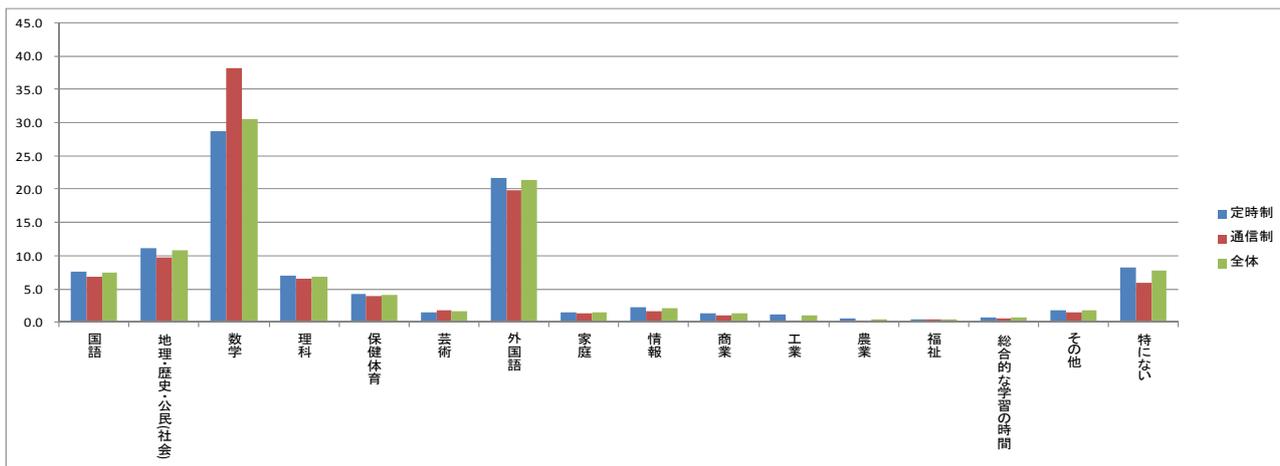
3-5 A図 最も好きな教科等



定時制課程では最も好きな教科は、保健体育が一番多く、体を動かしたいという生徒の欲求の表れだと考えられる。次いで特にないが続き、国語、地理・歴史・公民、数学が上位を占めている。芸術は学校で開設している教科が限られていることもあり、低い順位にあると考えられる。

3-5 B 図に現れているように、逆に数学は苦手な教科として上位にもランクインされている。自学自習が難しい教科であると考えられる。特に、通信制課程では、苦手な科目として数学を選んでいる生徒が4割近くになっている。小学校からの積み重ねになる科目であり、さらに中学校での不登校等が原因で学習が不十分であったと考ええると、難しいと考えてしまう生徒が多いと考えられる。また、定時制通信制課程では専門教科は開設している学校数が少ないことも考慮する必要がある。通信制課程でもほぼ同じような傾向であるが、授業(スクーリング)が少ない関係なのか、定時制課程に比べ保健体育が好きである割合が若干低い。逆に、教科書を読んで勉強する事を必要としていることから、国語が好きという生徒の割合が若干高い。

3-5 B図 最も苦手な教科等

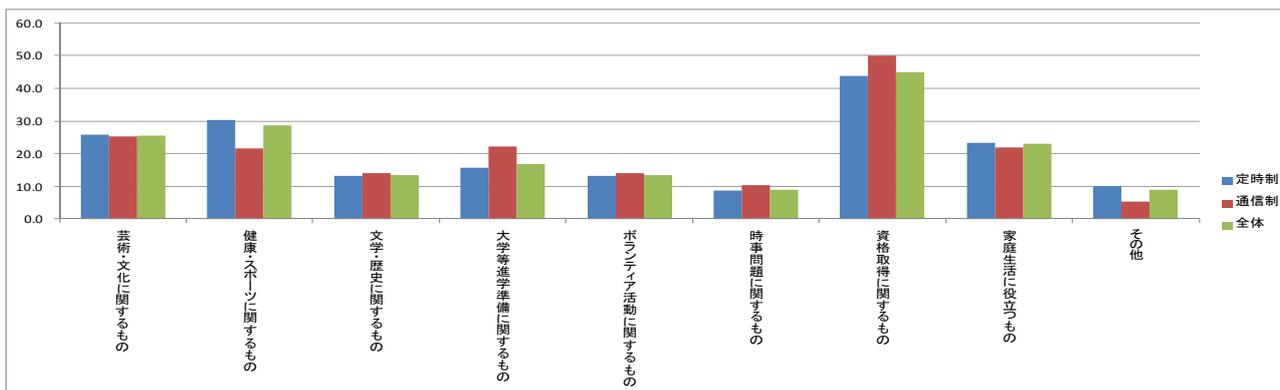


全体的に苦手な教科のトップは、数学を30.6%の生徒が選んでいる。続いて英語が21.1%を示している。両教科とも授業中のみならず以前からの蓄積と予習や復習が必要な教科であるためと考えられる。義務教育での学習が不登校等で十分でなかったと推測され、多くの定時制通信制課程では、ほとんどの教科科目の学習は小中学校での復習をしてから高校の内容に入る学校が多いようである。生徒の自尊心を傷つけずに復習させることは工夫を要するところである。

【3-6】 高等学校で学習する科目として、どのような科目があればよいと思いますか
(複数回答可)

- 1 芸術・文化に関するもの
- 2 健康・スポーツに関するもの
- 3 文学・歴史に関するもの
- 4 大学等進学準備に関するもの
- 5 ボランティア活動に関するもの
- 6 時事問題に関するもの
- 7 資格取得に関するもの
- 8 家庭生活に役立つもの
- 9 その他

3-6図 高等学校で学習することを望む科目

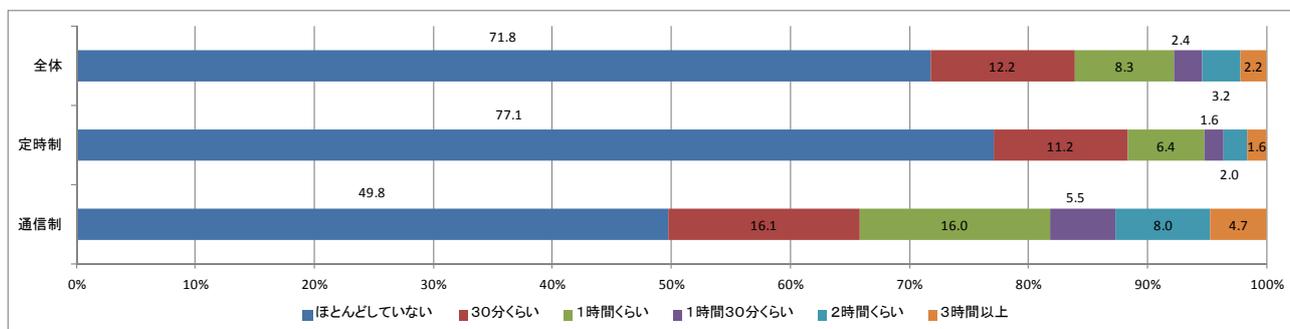


全体として見ると、資格取得に関するものが約半数の44.9%に達している。高卒の資格と共に就職等に役立つ資格取得に努力している姿が見られる。学校現場でも生徒の資格取得に向けた紹介や補習を実施しているところが多くある。

続いて健康・スポーツに関するものが続いており、体力の充実を願っていると考えられる。芸術・文化に関するものや家庭生活に役立つ教科など、直接の学力だけでなく教養の向上が図れる科目を望む声が20%以上見られる。このような多様な要望に対してどの様に学校の特色を出していくかは難しい課題である。

- 【3-7】 普段、家庭等で、1日平均どれくらい学習(予習・復習)しますか
- 1 ほとんどしていない 2 30分くらい 3 1時間くらい
 4 1時間30分くらい 5 2時間くらい 6 3時間以上

3-7図 家庭等での1日平均の学習時間

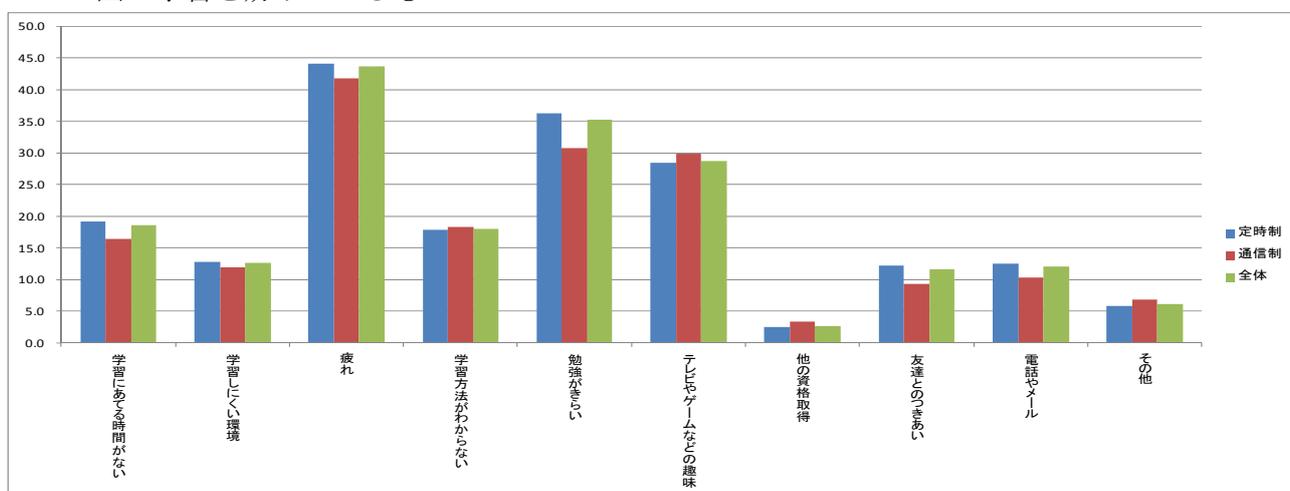


定時制課程で77.1%、通信制課程で49.8%の生徒が家庭学習を全くしていないことがわかる。基本的な生活習慣の確立だけでなく、家庭学習を習慣づけるための指導法を工夫すべきである。その一方で2時間以上家庭学習をする生徒は定時制課程で2.0%、通信制課程で8.0%である。仕事や家事で忙しい生徒も多数いることがうかがえるため、家庭学習より学校内の学習室等の整備や指導の工夫が検討課題として考えられる。

通信制課程では、レポート作成を行わないと進級・卒業ができないことから、家庭学習をしている生徒が半分以上になっている。逆に、家庭学習をしていない生徒はレポートの提出ができないので、不認定になっている生徒の多くは家庭学習のない生徒と考えられる。

- 【3-8】 家庭等で、あなたの学習を妨げているものは何ですか (複数回答可)
- 1 学習にあてる時間がない 2 学習しにくい環境 3 疲れ
 4 学習方法がわからない 5 勉強がきらい 6 テレビやゲームなどの趣味
 7 他の資格取得 8 友達とのつきあい 9 電話やメール 10 その他

3-8図 学習を妨げているもの



学習を妨げるものとしては、「疲れ」が43.6%「勉強嫌い」が36.2%「テレビやゲーム等のため」

が 28.7%に達している。半数は仕事（アルバイトも多い）と勉学の両立が難しいことが要因だと考えられるが、多くの定時制通信制課程の生徒は学習習慣以前の勉強に対する姿勢に問題があることが現れているといえる。「テレビやゲームなどの趣味」が 28.7%、「学習に充てる時間がない」が 20%弱、「友達とのつきあい」が 15%弱や「電話・メールに時間が取られる」が 15%弱を挙げている生徒も比較的多く見られる。

その他の理由としては、育児・パチンコ・家族等があり、環境的に恵まれない様子がわかると共に、賭け事などに夢中になってしまう生徒もいることがわかる。

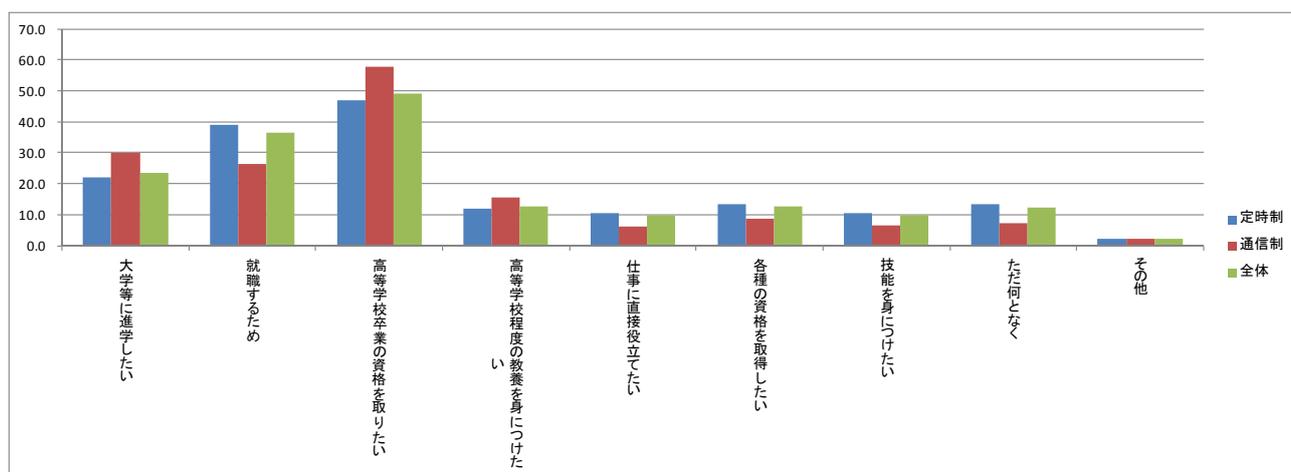
また、やる必要がないとかやる気が起こらないなどの本人の姿勢に帰結できる理由も多くあり、学習に対する姿勢が問われることがわかる。

通信制課程についても定時制課程とほとんど同じ傾向で変わらない。

【3-9】 高等学校で学習している目的は何ですか（複数回答可）

- 1 大学等に進学したい
- 2 就職するため
- 3 高等学校卒業の資格を取りたい
- 4 高等学校程度の教養を身につけたい
- 5 仕事に直接役立てたい
- 6 各種の資格を取得したい
- 7 技能を身につけたい
- 9 ただ何となく
- 10 その他

3-9 図 高等学校で学習している目的



定時制課程では「高卒資格を取りたい」が 49.2%を占めている。次いで「就職」は 36.5%、「大学進学希望」も 20%を超えている。一方で「教養を身につけたい」という回答も 12.6%あり、「ただ何となく」も 12.3%おり、その他の中では、生涯学習の観点から基礎・基本をもう一度身につける等の学び直しの希望も見られた。

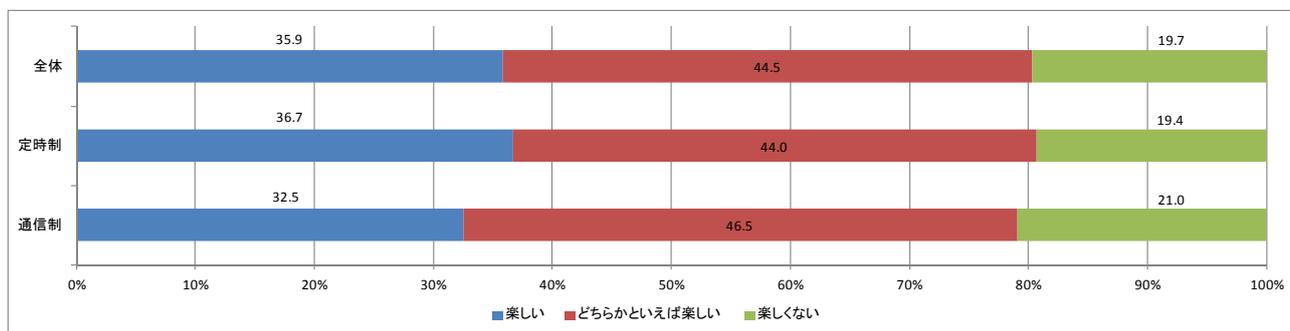
通信制課程では、卒業の資格を取りたいが 60%を示している。これは、入学の動機・理由の第一位であるように、当面の目標に高校卒業を掲げ、卒業してからその後のことは考える生徒が多いことがわかる。

また、進路変更をして通信制に入学した生徒も多いことから、大学等への進学を掲げている生徒も 3割程度いるが、就職を希望する生徒も 28.0%と多い。

【3-10】 学校生活は楽しいですか

- 1 楽しい 2 どちらかといえば楽しい 3 楽しくない

3-10図 学校生活は楽しいですか



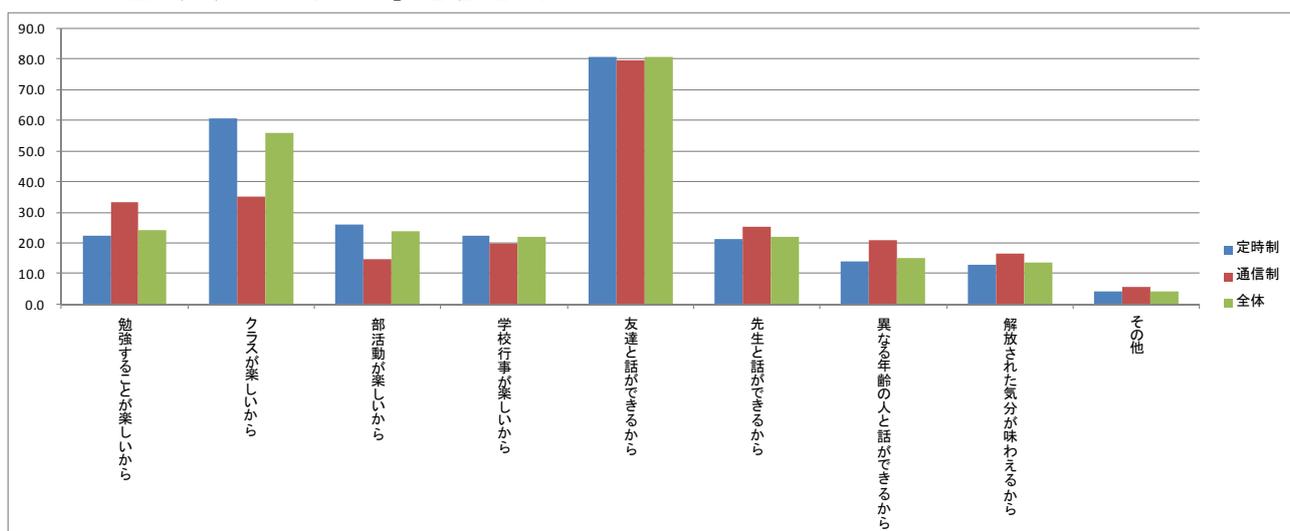
学校生活が「楽しい」「どちらかといえば楽しい」という生徒が、定時制通信制課程共に8割程度いることは喜ばしいことである。

しかし、「楽しくない」と答えた生徒が約2割程度いる。この2割への対処をあやまると退学や問題行動に至る恐れがある。平均するとどの学校でも2割ほどの生徒が楽しくない学校生活を送っていると考えて、行事の企画等を行う必要がある。

【3-10(1)】「1 楽しい」と答えた人は、その理由は何ですか(複数回答可)

- 1 勉強することが楽しいから 2 クラスが楽しいから
- 3 部活動が楽しいから 4 学校行事が楽しいから
- 5 友達と話ができるから 6 先生と話ができるから
- 7 異なる年齢の人と話ができるから 8 解放された気分が味わえるから
- 9 その他

3-10図(1) 1 「楽しい」と答えた人の理由



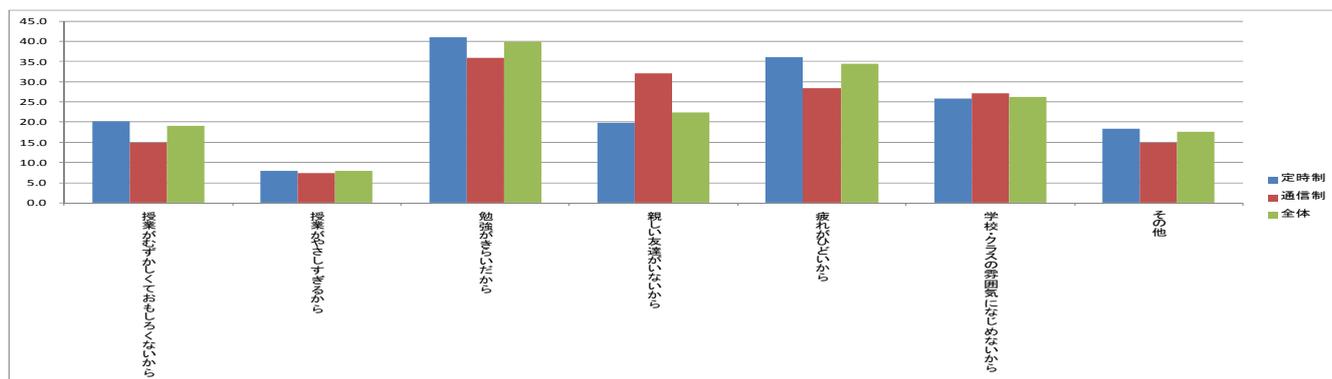
学校が楽しいと答えた生徒の主な理由は、上のグラフより「友達と話ができるから」という生徒が80.0%を示し、次いで「クラスが楽しい」からが60%を占めている。同じ境遇の友人との話し合いの場であることや、クラスに自分の居場所があることが楽しい理由と考えられる。また、部活動に居場所がある生徒は約24%、「勉強が楽しい」、「先生と話ができる」という回答が続いている。

定時制通信制課程の生徒にとっては、「仲の良い友人がいるから」、「授業がわかるようになったから」、「勉強以外でも学ぶことが出来るから」等、学校が気の合う友人との交流の場であることや、クラブ活動の場として一時の息抜きの居場所になっていると考えられる。

【3-10(2)】「3 楽しくない」と答えた人は、その理由は何ですか(複数回答可)

- 1 授業がむずかしくておもしろくないから 2 授業がやさしすぎるから
- 3 勉強がきらいだから 4 親しい友達がいないから 5 疲れがひどいから
- 6 学校・クラスの雰囲気になじめないから 7 その他

3-10図(2) 「3 楽しくない」と答えた人の理由



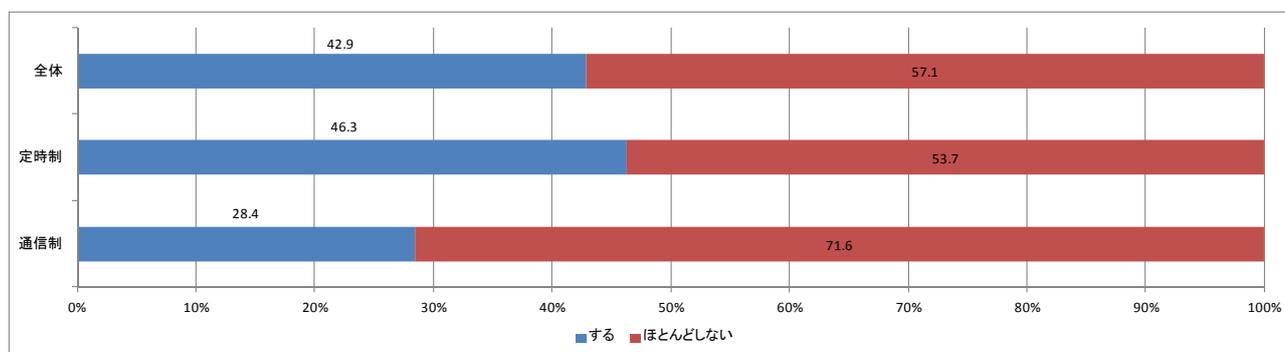
学校が楽しくないと答えた主な理由としては、定時制課程では「勉強がきらいだから」と答えた生徒が40%強、「疲れがひどいから」が35.5%、「学校・クラスになじめない」生徒も25%にも達している。また、授業に関することが26.8%、「親しい友人が居ないから」という人間関係に関してはほぼ20%を示していて、親しい友人との交流の場としている生徒と反対に友人を作れない生徒とが二極化を示していると考えられる。

通信制課程でもほぼ同じような傾向が見られるが、単位制の学校が多くクラスという概念がないので、親しい友達がいない生徒が多く見られる。

【3-11】 欠席・遅刻をしますか

- 1 する 2 ほとんどしない

3-11図 欠席・遅刻をしますか

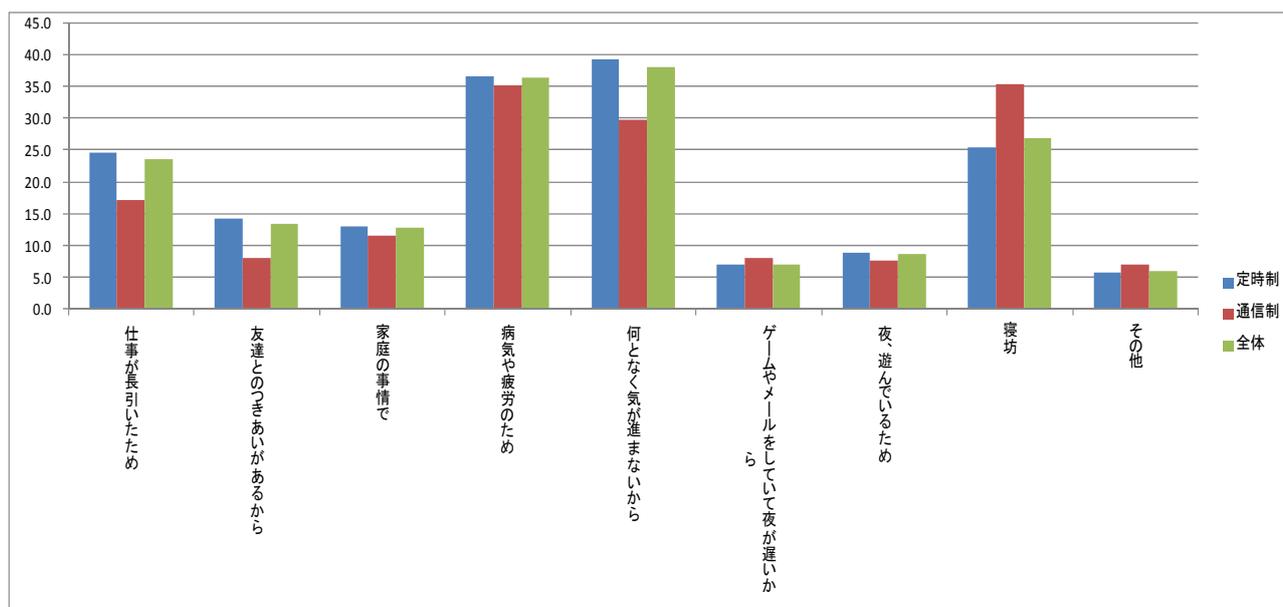


学校を欠席したり遅刻したりするかという問いに対し定時制課程に在学している生徒の46.3%、通信制課程の28.4%が欠席または遅刻をすると答えている。

【3-11 (1)】「する」と答えた人は、その理由は何ですか。(複数回答可)

- 1 仕事が長引いたため
- 2 友達とのつきあいがあるから
- 3 家庭の事情で
- 4 病気や疲労のため
- 5 何となく気が進まないから
- 6 ゲームやメールをしていて夜が遅いから
- 7 夜、遊んでいるため
- 8 寝坊
- 9 その他

3-11 図 (1) 「する」と答えた人の理由



生徒が学校を欠席または遅刻をする主な理由として、定時制課程では「何となく気が進まない」「病気や疲労のため」「仕事のため」「寝坊」の順になっている。通信制課程では、「寝坊」「病気や疲労のため」「何となく気が進まない」の順である。

その他の記述に、このアンケートには三部制の午前部も含まれているので、「アルバイトで疲れて帰宅し寝てしまい起きられない」「夜遅くまで起きていて昼間寝ている」などの回答があり、夜間定時制課程でも一旦仕事から帰り寝てしまい、寝坊する生徒が少なからず含まれていると考えられる。

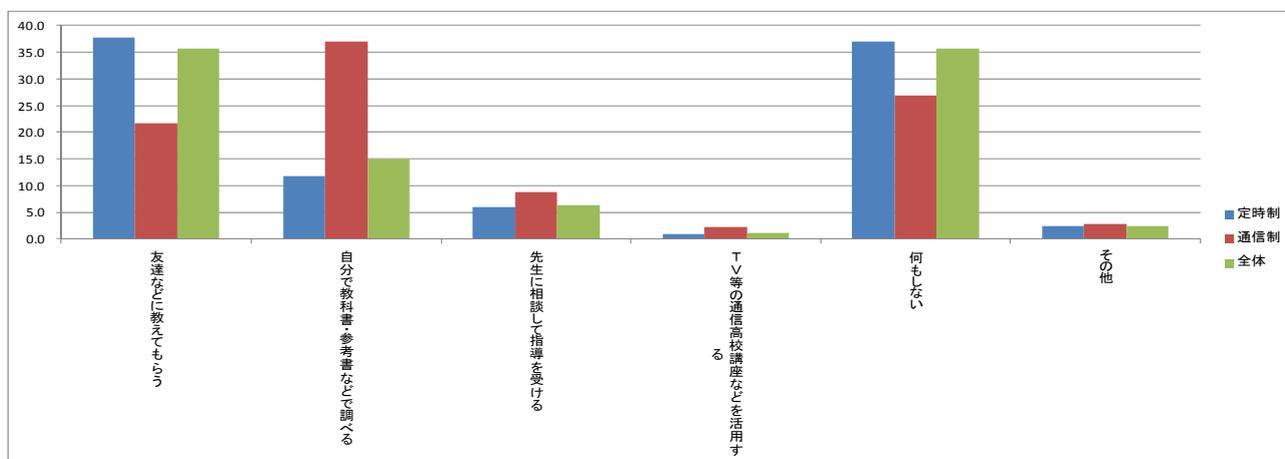
また、定時制課程と通信制課程で比較的差がでたのは「寝坊」で通信制が多く、「仕事が長引いたため」「友達とのつきあいがあるから」や「家庭の事情」ではともに通信制課程の方が少なかった。

【3-11 (2)】「する」と答えた人は、授業の遅れをどの様にして取り戻していますか

- 1 友達などに教えてもらう
- 2 自分で教科書・参考書などで調べる

- 3 先生に相談して指導を受ける 4 TV等の通信高校講座などを活用する
5 何もしない 6 その他

3-11図(2) 「する」と答えた人の授業の遅れを取り戻す方法



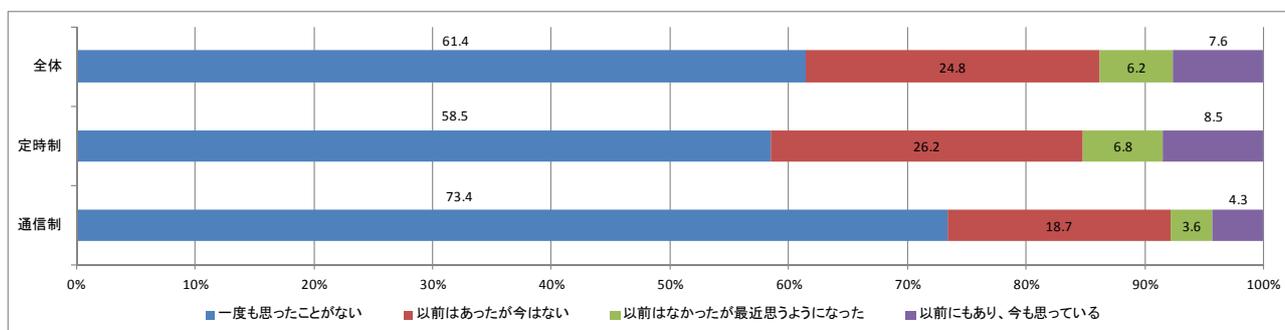
欠席や遅刻をした場合の授業の遅れをどの様にして取り戻しているかを聞いたのが3-11図(2)ある。定時制課程は「友達などに教えてもらう」、通信制課程は「自分で教科書・参考書などで調べる」がそれぞれトップにきて、次いで定時制課程も通信制課程も「何もしない」の順である。これは、毎日登校する定時制課程に対して、スクーリングにのみ登校する通信制課程では自分で教科書・参考書を読んでレポートを作成するため、欠席した場合には自力でレポート作成を行わなければならないことから自分で教科書・参考書などで調べる割合が高くなっていると考えられる。また、公立通信制高校の多数の学校が教科書を共通で採用し、その教科書に沿った内容で通信高校講座が放送されていることから、授業と同じように利用している生徒も少なくない。

定時制通信制課程で特徴的な回答の一つは「先生に相談して指導を受ける」が極めて少なかったことが上げられる。

【3-12】 今通っている学校を退学したいと思っただことがありますか

- 1 一度も思ったことがない 2 以前はあったが今はない
3 以前はなかったが最近思うようになった 4 以前にもあり、今も思っている

3-12図 退学を考えた



比較的転退学の多い定時制通信制課程において、退学をこれまでも考えたことがない生徒が定時制課程で 58.5%、通信制課程で 73.4%を示したのに対し、今退学をしたいと思っ

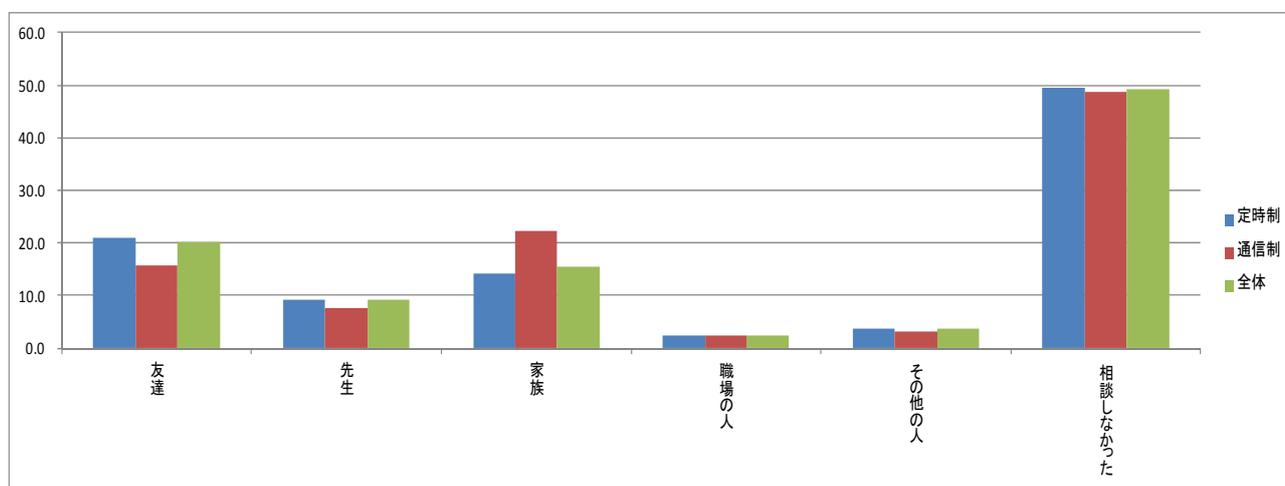
前はなかったが最近思うようになった」と「以前にもあり、今も思っている」の合計)は、定時制課程で15.3%、通信制課程で7.9%と大きな数値である。

本調査の実施時期から考えると、不登校などの長期欠席者で本アンケートに答えている生徒はほとんど含まれないと推測できる。特に、定時制課程では今退学をしたいと思っている生徒が比較的多数在学していると考えられる。通信制課程では、第3図(P・28)に示したように2校目以上経験ある生徒が45.3%という高い数値を示しているので、転退学を考える生徒が少ないと考えられる。

【3-12(1)】「以前はあったが今はない」と答えた人は、誰と相談して退学を思いとどまりましたか

- 1 友達 2 先生 3 家族 4 職場の人 5 その他の人
6 相談しなかった

3-12図(1) 「以前はあったが今はない」と答えた人の相談相手

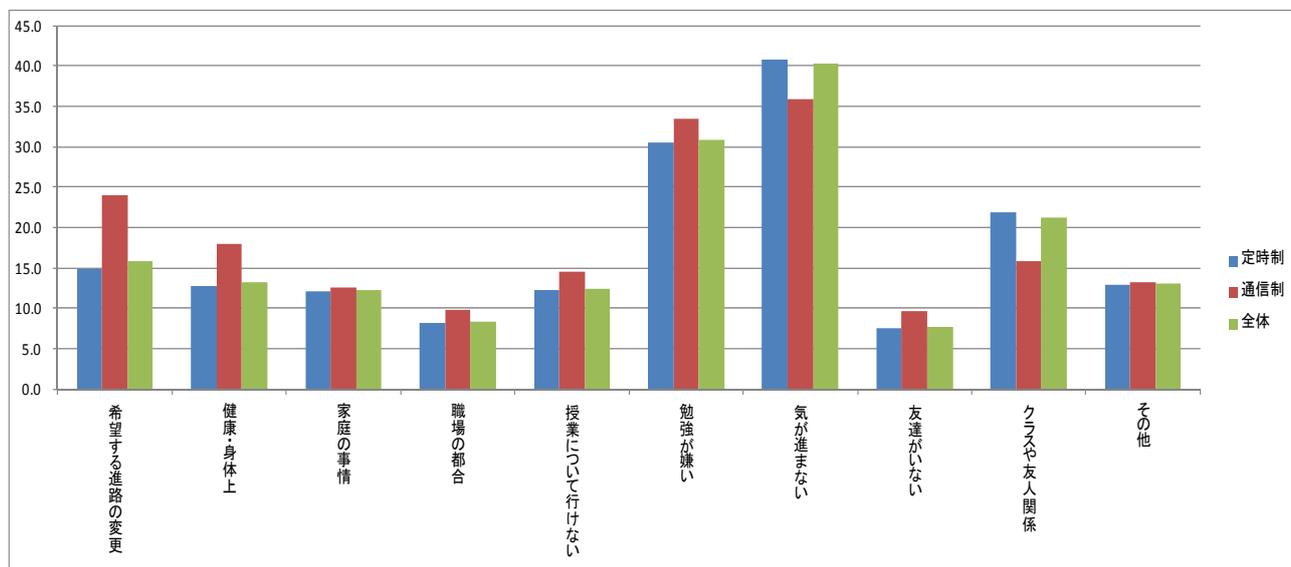


定時制課程も通信制課程も「相談しなかった」が半数近くあり、相談しても友達や家族などが多く、先生は10%にも満たない。教員は今後更に生徒との人間関係や信頼関係を構築する必要があると考える。特に定時制課程では入学時に家族に相談した生徒が多かった関係からか、退学時にも家族に相談する生徒が若干多くなっている。

【3-12(2)】「以前はなかったが最近思うようになった」または「以前にもあり、今も思っている」と答えた人は、その原因はどれですか。(複数回答可)

- 1 希望する進路の変更 2 健康・身体上 3 家庭の事情 4 職場の都合
 5 授業について行けない 6 勉強が嫌い 7 気が進まない
 8 友達がいらない 9 クラスや友人関係 10 その他

3-1 2 図(2) 「以前はなかったが最近思うようになった」または「以前にもあり、今も思っている」と答えた人の原因



定時制、通信制課程共に「気が進まない」が40%、35%を超え、「勉強が嫌い」が定時制課程で30%、通信制課程が34%となっている。また、通信制では「希望する進路の変更」が24.0%、定時制では「クラスや友人関係」を上げる生徒が多く、次いで「進路変更」14.8%、「健康・身体上」13%、と比較的高い比率を示している。「その他」の中に「全日制へ行きたい」「部活動をしたい」という回答や「(高校を退学して)すぐに就職したい」という回答もあり、高校生活を全日制のように送りたいという生徒と、就職ができれば高校を卒業しなくても働きたいという生徒に大きく分かれる。

「授業について行けない」と回答した生徒も定時制、通信制課程共に10%を超えていて、「その他」の中には、「先生が嫌い」など教員に対する不信感や不満を訴える回答も見られた。

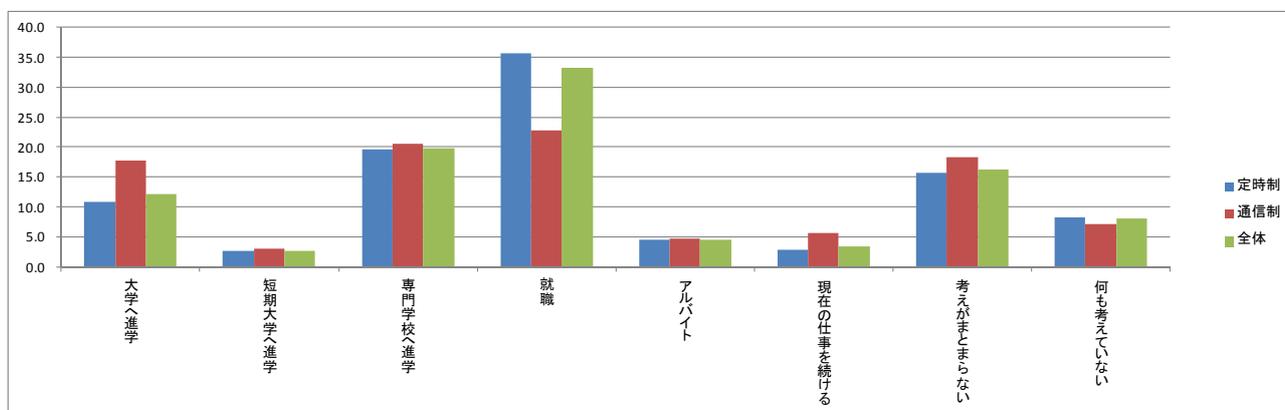
通信制課程では、「健康・身体上」が高率を示し、毎日登校しなくても自宅で学習できるため、健康上、身体上に不安のある生徒が通信制に多く在籍していることがうかがえる。

【3-1 3】 卒業後の進路について、どう考えていますか

- 1 大学へ進学 2 短期大学へ進学 3 専門学校へ進学 4 就職

- 5 アルバイト 6 現在の仕事を続ける 7 考えがまとまらない
8 何も考えていない

3-1-3 図 卒業後の進路

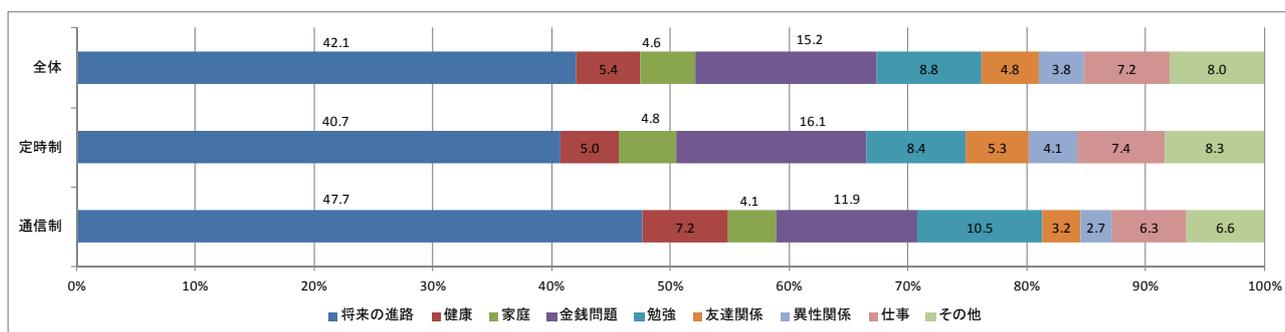


高等学校卒業後の進路については、定時制課程で 35.7%、通信制課程で 22.8%が就職と答えている。大学、短大、専門学校等への進学を希望する比率は、定時制課程で 33.0%、通信制課程で 41.4%となり、通信制課程では進学希望が就職希望を上回る結果が出ている。最近の就職難という状況も考えると、特に定時制、通信制課程を卒業して、就職をするより、進学してから就職をした方がより有利になると考えている生徒が多いのではないかと推測される。全日制課程から進路変更で通信制課程に入学した生徒などは、卒業後の目標は変わらずに大学進学を考えている生徒が多く在籍している。

【3-1-4】 現在の悩みは何ですか

- 1 将来の進路 2 健康 3 家庭 4 金銭問題 5 勉強
6 友達関係 7 異性関係 8 仕事 9 その他

3-1-4 図 現在の悩み

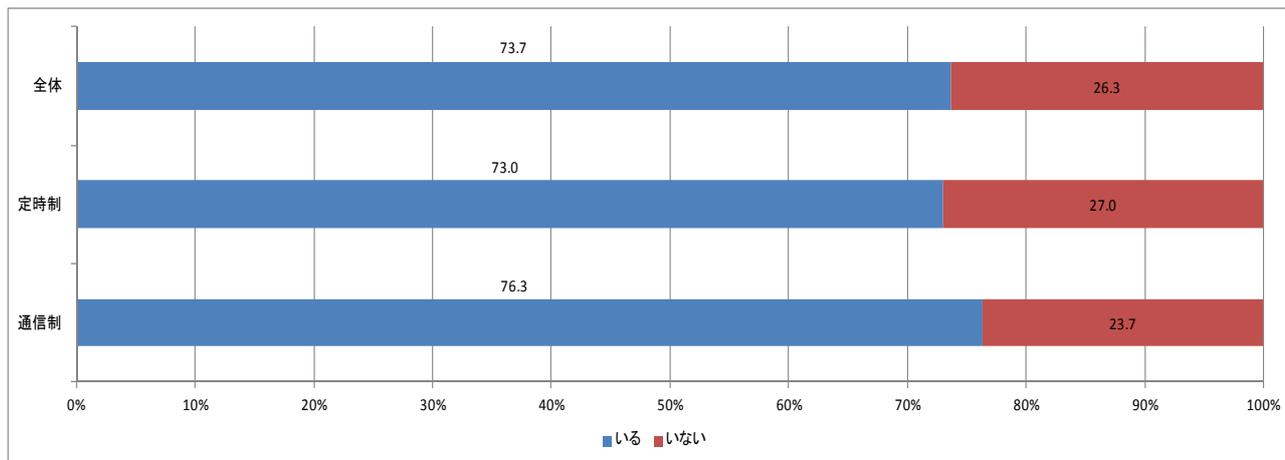


現在の悩みについて聞いてみると、定時制課程で 40.7%、通信制課程で 47.7%の生徒が「将来の進路」を上げている。次いで定時制課程では「金銭問題」「勉強」「仕事」「異性」と続き、通信制課程では「金銭問題」「勉強」「健康」「友人関係」の順となっている。最近の経済状況や就職内定状況等が、生徒たちの現在の悩みにも大きく影響していると考えられる。

【3-1-5】 悩みを相談できる人がいますか

- 1 いる 2 いない

3-15 図 悩みを相談できる人がいますか



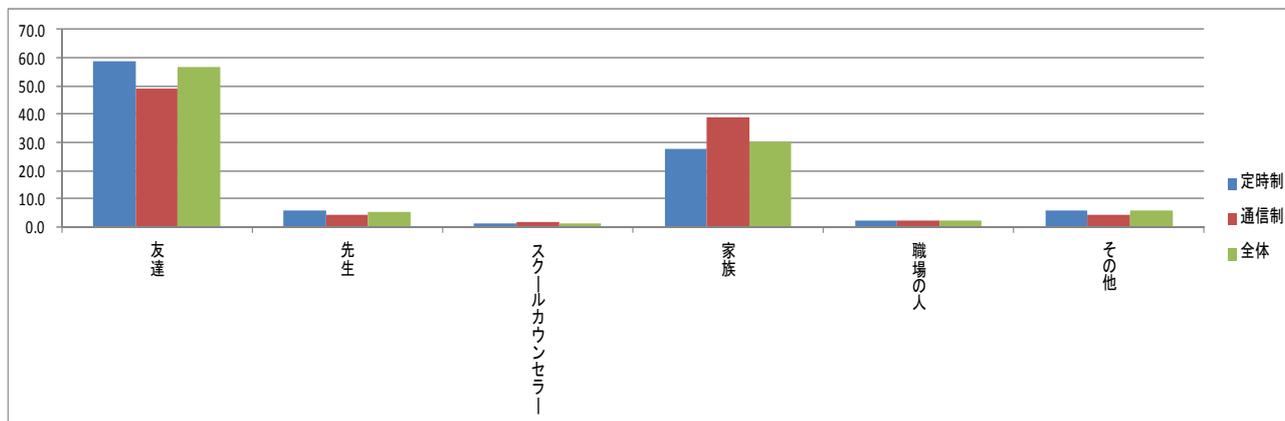
在校生に悩みを相談できる人がいますかという問いに、定時制・通信制課程ともに相談できる人がいるという回答は70%以上の高率であった。反面悩みがあっても相談相手がないという生徒は定時制課程で27.0%、通信制課程で23.7%であった。

4人に一人ないしは3人に1人の生徒が悩みを相談できる人がいないということである。

【3-15 (1)】 「1 いる」と答えた人は、主に誰ですか

- 1 友達 2 先生 3 スクールカウンセラー 4 家族 5 職場の人
6 その他

3-15 図 (1) 「1 いる」と答えた人の主な相談相手



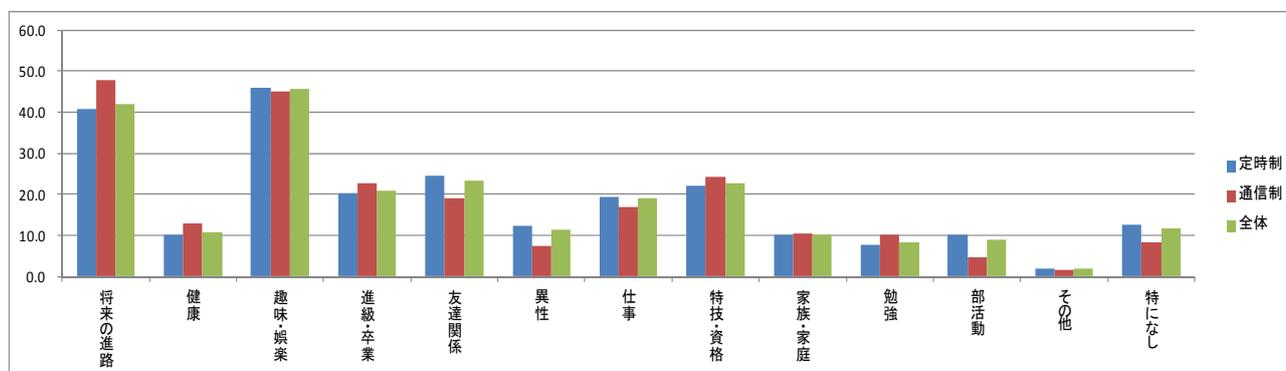
悩みを相談できる相手について聞いたものが3-15(1)図であるが、定時制通信制課程共に「友達」「家族」と答えている。定時制課程と通信制課程を比較すると、家族に関しては、通信制課程の割合が定時制課程より多く、友達は定時制課程が通信制課程より多くなっていることである。通信制課程の生徒は人間関係を築く機会も少なく、家族のような身近な人に悩みを相談する相手となっていると考えられる。また、学校の先生やスクールカウンセラー、職場の人の割合が低くなっている。

【3-16】 現在、関心のあることは何ですか (複数回答可)

- 1 将来の進路 2 健康 3 趣味・娯楽 4 進級・卒業 5 友達関係

- 6 異性 7 仕事 8 特技・資格 9 家族・家庭 10 勉強
11 部活動 12 その他 13 特になし

3-16図 関心のあること

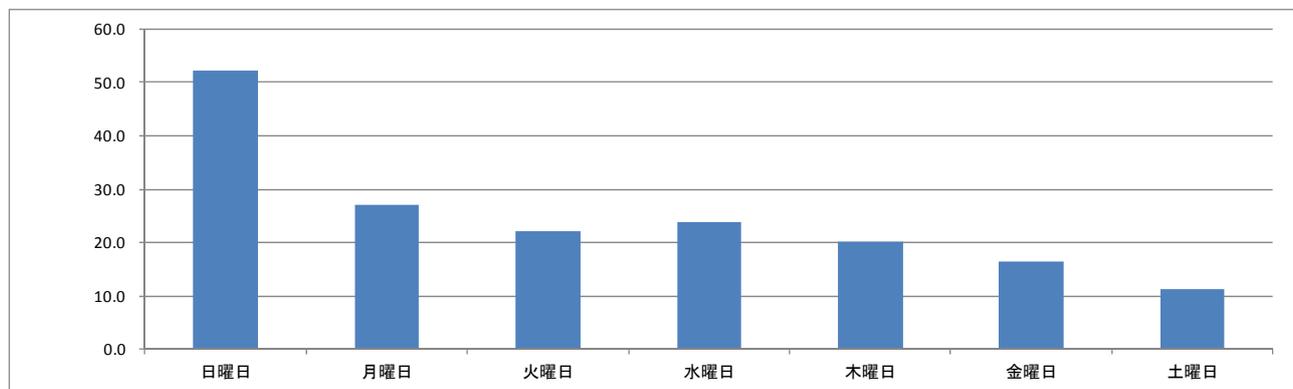


現在、「関心のあることは何ですか」、という質問に対する回答について見たものであるが、定時制・通信制課程共に関心のあることは「趣味・娯楽」と「将来の進路」であるが、強いて挙げるとすると「将来の進路」「友達関係」「進路・卒業」「特技・資格」で若干の差が見られた。

【3-17】スクーリングを何曜日に行っていますか。（通信制の生徒のみ調査）
（複数回答可）

- 1 日曜日 2 月曜日 3 火曜日 4 水曜日 5 木曜日
6 金曜日 7 土曜日

3-17図 スクーリングを行っている曜日



全日制課程や定時制課程に併設されている通信制課程の場合、スクーリングで使用する教室の確保から日曜日に最も多く登校している。働きながら学習する生徒にとっても仕事が休みになる日曜日に登校することが適している。

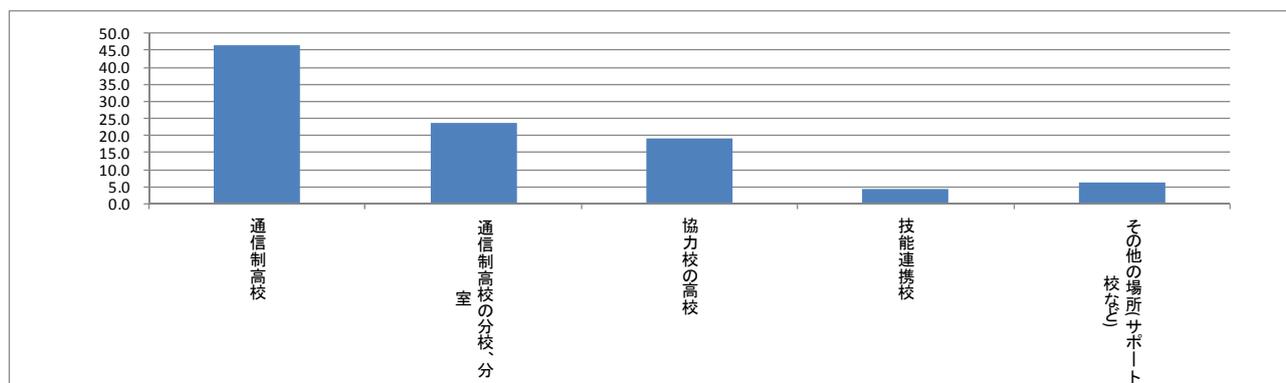
しかし、平日（月曜～金曜）に登校する生徒の総数は日曜日をはるかに上回っている。これは通信制課程に通ってくる生徒の年齢層が全日制・定時制課程とほぼ変わらなくなっていることで、小・中学校の時と同じように、平日に学校に通い、土曜・日曜は休むスタイルを選ぶ生徒が多いことがわかる。

【3-18】スクーリングの場所はどこですか（通信制の生徒のみ調査）

- 1 通信制高校 2 通信制高校の分校、分室 3 協力校の高校

4 技能連携校 5 その他の場所(サポート校など)

3-18 図 スクーリングの場所

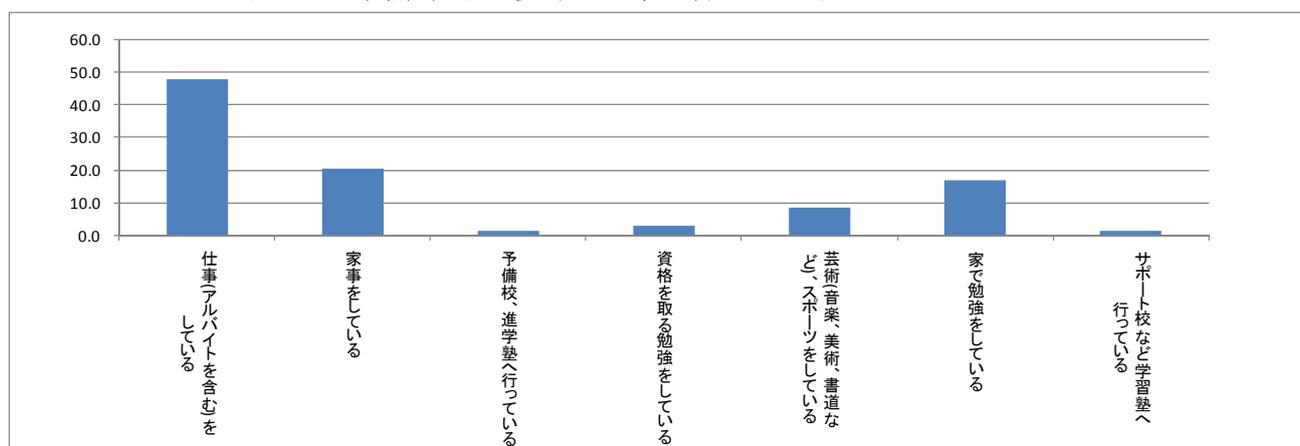


スクーリングを受講する場所としては、通信制高校が圧倒的に多い。私立の通信制高校で、サポート校を併設している会場でスクーリングを受講している生徒は少なかった。これは、アンケートを通信制高校の本校に送付したので、サポート校の生徒の声が反映されなかったと考えられる。

【3-19】 スクーリングに出席する日以外について、日中（朝から夕方までの間）主として何をしていますか。（通信制の生徒のみ調査）

- 1 仕事(アルバイトを含む)をしている。
- 2 家事をしている。
- 3 予備校、進学塾へ行っている。
- 4 資格を取る勉強をしている。
- 5 芸術(音楽、美術、書道など)、スポーツをしている。
- 6 家で勉強をしている。
- 7 サポート校など学習塾へ行っている。

3-19 図 スクーリングに出席する日以外に日中に行っていること



働きながら学ぶ生徒への通信制課程といわれる通りに、仕事をしながら学んでいる生徒が半数を示している。定職だけでなくアルバイトも含めたために、このような高い数値を示している。

その他には、家で勉強している生徒が17%程度いる。これは、十代で純粋に通信制課程で勉強をしている生徒を示していると考えられる。また、芸術関係やスポーツ関係の活動をする為に進学先

として通信制を選んだ生徒が8%程度在籍している。

サポート校に通っている生徒は1.5%になる。これは、18の質問(P/43)と同様に今回の調査の方法により、対象の生徒の声が聞けなかったことから、このような結果になったと考えられる。

第3章 まとめ：

以上まとめたものが定時制通信制課程に在籍する生徒の考え方をアンケート調査した結果である。まず、定時制通信制課程に入学を決めたのは誰ですかという問いに対しては、53.3%が生徒自身で決めている。次いで家族や学校の先生に勧められてということになっている。職場の人や先輩に勧められてという回答が低いのは勤労青少年の割合が低いことを示しているといえる。わずかではあるが、その他の中に保護司や青少年センター等の指導や家族や学校の先生に勝手に決められたというような消極的な回答もあった。

入学した動機・理由については、定時制課程では「高等学校の卒業資格が必要だと思ったから」が30.4%で、特に通信制課程では45.8%の高率を示している。次いで「全日制課程に合格する自信がない・合格しなかったから」が全体で18.1%、「経済的に働く必要があったから」が10.0%、「経済的には問題はないが、働きながら学ぶことに意義があると思った」の7.5%と続いている。今回の特徴的な回答として、「自分のペースで学習が進められるから」が16.0%、「健康・身体的理由により毎日通学出来ないから」が通信制課程では8.6%という高率を示していることである。

また、定時制通信制課程に入学して学習意欲が高まったか否かは、「より高まった」と「どちらか」といって高まったを併せて43.8%であるが、「余り変わらない」が32.3%で、入学当時より「意欲が低下した」生徒が16.4%と比較的高い値を示している。項目3-10(2)に見られる高校が楽しくないという理由の一つに「授業が難しすぎる」または「授業が易しすぎる」があるように、学習内容の精選や指導法の工夫をこらし生徒のニーズを念頭に置いた学習指導法に努めることが大切である。

好きな教科については保健体育が定時制課程では20%を超えているのに対し通信制課程では国語、社会、芸術を好きな教科に上げている。苦手な教科としては、数学、外国語を上げているが、特に、通信制課程では数学を40%近くの生徒が回答しているのは、自学自習が難しい教科であるためと考えられる。高等学校ではどのような科目を学習したいかを聞いてみると、定時制課程で45%、通信制課程50%が資格取得に関係する科目を共に上げている。高等学校卒業資格と共に就職等に有利な資格取得目的を考えていることが理解できる。

定時制通信制課程の生徒は家庭での学習に費やす時間を問うと、定時制課程では77.1%、通信制課程では49.8%の生徒が家庭学習はなしと答えている。一方、1時間以上家庭で学習をする生徒は、定時制課程で11.6%、通信制課程で34.2%がいることがわかる。通信制課程では自学自習が原則という特徴が現れているといえる。定時制通信制課程の生徒のほとんどが家庭学習を行っていない理由については、定時制通信制課程ともに「疲れ」43.6%、続いて「勉強嫌い」33.6%、「テレビやゲームなどの趣味」28.7%、「学習に充てる時間がない」20%弱で、家庭学習習慣以前の自ら学ぼうとする学習に対する姿勢に問題がある。

それでは、高等学校で学ぶ目的についてはどうかというと、「高等学校卒業の資格取得」49.2%、「就職のため」36.5%、「大学等への進学希望」も20%強であった。疲れ、勉強嫌いが多い反面、学校生活は楽しいと答えた生徒は、定時制通信制課程ともに80%も在学していることである。残り

の20%は楽しくないという回答であるが、この生徒の扱いが問題行動や退学に結びつく極めて重要なことである。楽しいと答えた生徒の理由は学校では「友達と話ができるから」が80%、続いて「クラスが楽しいから」が高率を示している。学校やクラス、クラブ活動に居場所を見出しているように考えられる。一方、学校は楽しくないと答えた生徒は、「勉強嫌い」40%、「疲れるから」「学校やクラスの雰囲気馴染めないから」「親しい友達がないから」「授業が難しくて面白くないから」の順で授業や人間関係に馴染めない生徒と考えられる。

生徒の欠席・遅刻については、定時制課程の生徒の半数弱の46.3%が欠席・遅刻をすると答えている。反面、通信制課程の生徒は28.4%と定時制・通信制課程で大きな差が出るが、通信制がスクーリングに出席だけという制度の違いによるものと考えられる。欠席・遅刻の主な理由については、定時制、通信制課程ともに「病気、疲労のため」を上げているほか定時制課程では「何となく気が進まなくて」「仕事が長引いた」「寝坊をした」を上げているのに対し、通信制課程では「寝坊」が高い比率を示している。また、欠席・遅刻の遅れをどのように取り戻しているかの間に、定時制課程では「友達に教えて貰う」ほか「何もしない」が高い比率を示し、通信制課程では「自分で教科書・参考書を調べる」が35%以上で次いで「何もしない」「友達に教えて貰う」の順である。「学校の先生に相談をして指導を受ける」割合が少なく、欠席・遅刻をする生徒に対する授業の遅れを取り戻す定時制通信制課程としての指導体制の確立が必要であると考えられる。

今在学している学校を退学したいと思っているかという質問に対しては、定時制課程では15.3%、通信制課程では7.9%の生徒が退学を考えていると回答している。しかし、以前は退学を考えたが今はその考えはないという生徒に誰と相談をして思いとどまったかとただすと「誰にも相談はしなかった」という回答が50%を占め、定時制課程では「友達」に、通信制課程では「家族」に相談したという回答が20%を示している。退学を考える主な理由は、「気が進まない」「勉強嫌い」「友人関係」等を上げている。通信制課程では特に「希望する進路変更」「健康上・身体上」を上げているが、毎日登校しなくても自宅で学習ができるから、という反面「健康上・身体上」に不安のある生徒が通信制に多く在籍していることがうかがえる。

卒業後の進路については、定時制課程で35.7%、通信制課程で22.8%が就職と答えている。大学、短大、専門学校等への進学を希望する比率は、定時制で33.0%、通信制課程で41.4%となり、通信制課程では進学希望が就職希望を上回る結果が出ている。最近の就職難という状況も考えると、特に定時制や通信制課程の高校を卒業して、就職をするより、進学してから就職をした方がより有利になると考えている生徒が多いのではないかと推測している。また、全日制から進路変更で通信制課程に入学した生徒などは、卒業後の目標は変えずに大学進学を考えている生徒が多く在籍していると考えられる。

定時制通信制課程に在籍している生徒に現在の悩みについて聞いてみると、定時制課程で40.7%、通信制課程で47.7%の生徒が「将来の進路」を上げている。次いで定時制課程では「金銭問題」「勉強」「仕事」「異性」と続き、通信制課程では「金銭問題」「勉強」「健康」「友人関係」の順となっている。最近の経済状況や就職内定状況等が、生徒たちの現在の悩みにも大きく影響していると考えられる。

次に悩みを相談できる人がいますかという質問に、定時制、通信制課程ともに相談できる人がいると回答した生徒は70%以上の高率であった。一方、悩みがあっても相談相手がないという生徒は定時制課程で27.0%、通信制課程で23.7%であった。4人に1人ないしは3人に1人の生徒が悩みを相談できる人がいないということになる。

相談する相手がいると回答した生徒に主として相談する人は誰かという質問に、定時制通信制課

程共に「友達」「家族」と答えている。定時制課程と通信制課程を比較すると、家族に関しては、通信制課程の割合が定時制課程より多く、友達は定時制課程が通信制課程より多くなっていることである。通信制課程の生徒は人間関係を築く機会も少なく、家族のような身近な人が悩みを相談する相手となっていると考えられる。また、学校の先生やスクールカウンセラー、職場の人に相談する割合が低くなっている。

最後に、現在、関心のあることは何ですか、という質問に対する回答について見ると、定時制、通信制課程共に関心のあることは「趣味・娯楽」と「将来の進路」であるが、続いて「友達関係」「進路・卒業」「特技・資格」の順で多様な関心状況であった。

通信制課程の生徒にのみ質問した結果であるが、スクーリングの曜日、場所及びスクーリング以外の時間の過ごし方についての回答について、スクーリングの曜日は、日曜日が最も多く、続いて水曜日、月曜日であった。スクーリングの場所については、公立の学校及び私立の学校であった関係で本校が最も多く、分校・分室と続きサポート校についてはごく僅かであった。また、スクーリングの日、以外の過ごし方については、アルバイトを含んで仕事しているという回答が7割に近かった。その他に家で勉強をしている、スポーツや芸術に関わっている生徒がいることがわかった。

結びに替えて（提言）

本調査研究の趣旨に沿ってアンケート調査を行い、その結果を分析して、下記のような結論に達した。今後の高等学校定時制・通信教育の振興・発展のために資する資料となることを願っている。

1. 定時制通信制高等学校は勤労青少年の教育機関としてのみでなく、今後はより多様な生徒の再挑戦の教育機関として定時制・通信制教育の位置づけが望まれる。そのためには、生涯学習を目指し、再教育をも含めて、一人ひとりのライフステージに合わせる学習方法で学び、何時でも、何処でも、学びたいときに学べる条件と環境と施設の整備・拡充を図ることが必要である。また、修得した単位を積み上げる単位制高校の一層の推進が望まれる。

2. 勤労青少年の学び舎としての定時制通信制高校から、何時でも、何処でも、学びたいときに学べる高等学校へと様変わりしている。また、これまでの四年制から全日制課程と同じ三年制で卒業ができる三修制を採用している定時制通信制課程が7割以上になっている。それに伴い学校外での学修による単位認定が多様化してきているが、その単位認定基準については、設置者の裁量に委ねることも大切であるが、一定の基準が望まれる。

3. 生徒に直接質問をした結果、定時制通信制課程に入学した理由については、「高校卒業の資格が必要だから」「全日制課程に入学出来なかったから」の2項目で5割以上の回答があった。過去の「経済的に働く必要があったから」働きながら学ぶという定時制通信制課程から、中学時代からの不登校経験者、学力に自信のない生徒で全日制課程に入学出来ないから（むしろ消極的選択から）入学した生徒が多く在学しているのが実状がうかがえる。

学習を希望する教科を見ても、「卒業資格」や「大学等の進学」の他は社会人として生活していくための基礎知識を学びたいと多くの生徒が望んでいる。そのためには、人間教育を第一に社会人としての基本的な規則を修得できて「夢と希望」のもてる魅力ある学校づくりが望まれる。

4. 全日制高校中退生や不登校生、支援を必要とする生徒など多様な生徒の受け入れを担う定時制通信制課程において、今後望まれることは、教員の増員、相談室等の施設・設備の充実と養護教諭・スクールカウンセラーの全校に配置、教職員への生徒の進路・健康・精神面等の相談相手になる教員のカウンセリング研修等を実施することである。

生徒の相談相手を見てもそのほとんどが「友人」「家族」と答え、「先生」「スクールカウンセラー」に相談する生徒はほとんどいないのが実態である。それは生徒達は相談を望みながらも、少数の「先生」や「スクールカウンセラー」は忙しく、親身になって相談できる時間も、相談室もなく相談しにくいからと考えられる。

5. 安全対策教育に関しては、夜間等の災害時には教室に備え付けの懐中電灯が頼りであるという。全日制課程との併置校では単独の対策は困難であるという回答が多く、早急な安全対策についての指針をお願いしたい。

課題の一例を挙げると、

1. 生徒・家庭との連絡をどのように確実に取るか
2. 生徒の掌握、安全確保をどのように確実に取るか
3. 生徒を帰宅させる場合の適切な判断、手段、安全確保について不安

4. 夜間の停電時の防災について

5. 教職員の人数が少なく、十分な対応が困難である。

特に、単位制を実施している学校では、学年制と異なり生徒の安全管理が非常に難しく、災害等の発生時の連絡体制、生徒の状況確認・掌握などの安全対策の基本的な部分で困難を生じる。